



少林寺拳法 実業団全国大会

日時：昭和54年11月11日(日)

午後1時

場所：松下枚方体育館 大阪府枚方市

主催：少林寺拳法全日本実業団連盟

協賛：社団 法人 日本少林寺拳法連盟・少林寺拳法関西連絡協議会

後援：労働省・大阪府・大阪市・日本放送協会

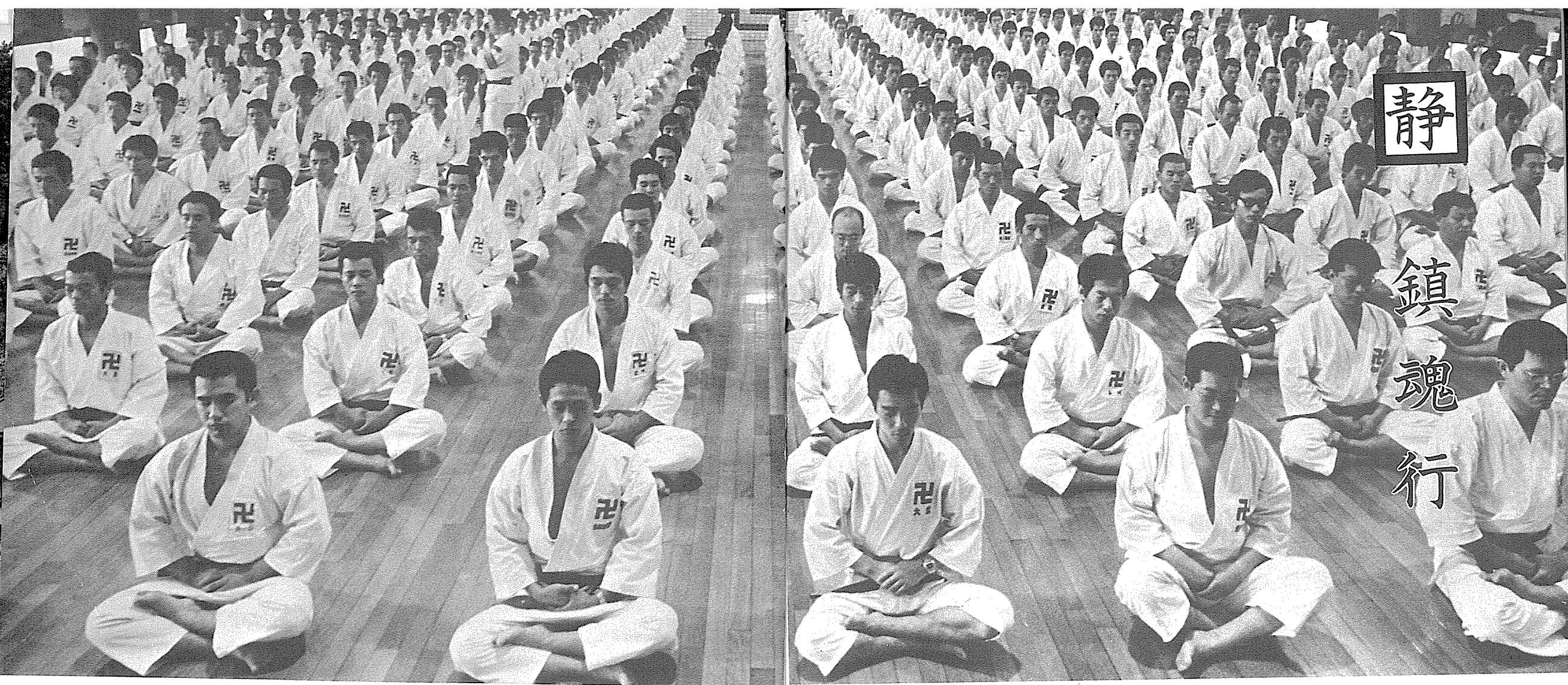
読売新聞社・読売テレビ放送・報知新聞社

財団 法人 日本武道館・日本武道協議会



金剛禅総本山少林寺全景

社団法人日本少林寺拳法連盟総本部である金剛禅総本山少林寺は、讃岐平野を一望に見渡す香川県立桃陵公園の南側、20,000平方米の敷地にその偉容を誇っている。すべて鉄筋コンクリート2階建で、道場は600畳と500畳のもの三つを合わせて四つあり、他に一度に1,000人の食事が出来る大食堂をはじめ、大小の講堂、会議室、300台収容の三つの駐車場等の設備があって、春夏の休みには全国から万余の大学生、高校生が合宿に来山するほか、7月から9月にかけて、数回に分けての全国指導者講習会が開催される。その他参禅者は年中跡をたたない。いつ帰山しても、我が家に帰って来たという安らぎを覚えさせる不思議な魅力に満ちた少林寺は、師家宗道臣管長と、80万余の門弟たちのかもす慈愛の心あふれる理想境である。又、帰山者は、その度に姿を変えてゆく少林寺に驚きの目を見はる。玄関の両脇には、中国政府から宗道臣師家におくられた大理石の白い唐獅子が目にあたらしい。また裏山に6層30メートルもの大雁塔が天を衝いて立つ日も間近。次の大会にはその偉容を掲載出来るのが楽しみである。



● 聖 句

○己れこそ己れの寄るべ、己れを措きて誰によるべぞ、
良く整えし己れこそ、まこと得がたき寄るべなり。

○自ら悪をなさば自ら汚れ、自ら悪をなさざれば自らが
淨し、淨きも淨からざるも自らのことなり、他者に依
て淨むることを得ず。

● 誓 願

一、我等此の法を修めるに当り、祖を滅せず師を欺かず、
長上を敬い、後輩を侮らず、同志互に親しみ合い援
け合い、協力して道の為につくすことを誓う。

一、我等一切の既往を清算し、初生の赤子として、真純

单一に此の法修行に専念す。

一、此の法は、済生利人の為に修行し、決して自己の名
利の為になすことなし。

● 礼 拝 詞

謹みて、天地久遠の大みちから、ダーマを礼拝し奉る。
我等無始よりこのかた、煩惱にまつわれて造りたる、も
ろもの罪とがを、悉くざんげし奉る。

我等この身今生より未来に至るまで、深く三宝に帰依し、
み教えに従い奉る。願くば良き導と加護を垂れさせ給え。

● 道 訓

すれば、即ち迷離す、故に道は、須臾も離るべからずと、
いう所以なり、人生れて世にある時、人道を尽すを貴ぶ、
まさに人道に於て、はする処なくんば、天地の間に立つ
べし、若し人あり、仁、義、忠、孝、礼、の事を尽さざ
れば、身世に在りと雖も、心は既に死せるなり、生を偷
むものとゆうべし、凡そ人心は、即ち神なり仏なり、神
仏即ち靈なり、心にはする処なくば、神仏にもはする処
なし、故に一動一靜、總て神仏の監察する処、報應昭々
として、豪厘も赦さざるなり、故に天地を敬い、神仏に
礼し、祖先を奉じ、双親に孝に、國法を守り、師を重ん
じ、兄弟を愛し、朋友を信じ、宗族相睦み郷党相結び、
夫婦相和し、人の難を救い、急を援け、訓を垂れて人を
導き、心を至して道に向い、過を改めて自ら新にし、惡
念を断ちて、一切の善事を、信心に奉行すれば、人見ず
と雖も、神仏既に早く知りて、福を加え、寿を増し、子
孫を益し、病い減り、禍患侵さず、ダーマの加護を得ら
れるべし。

● 信 条

一、我等は、魂をダーマよりうけ、身体を父母よりうけ
たる事を感謝し、報恩の誠をつくさんことを期す。

一、我等は、日本人として祖国日本を愛し、日本民族の
福祉を改善せんことを期す。

一、我等は、正義を愛し、人道を重んじ、礼儀を正し、
平和を守る眞の勇者たることを期す。

一、我等は、法を修め、心身を練磨し、同志相親しみ、
相援け、相譲り、協力一致して理想境建設に邁進す。



御挨拶

大 会 会 長

関西経済連合会会長
住友金属工業株式会社会長
少林寺拳法関西実業団連盟会長

日 向 方 齊

本日、ここに昭和54年度少林寺拳法実業団全国大会がこの関西の地において、かくも盛大に開催される運びとなりましたことは誠に嬉しく慶賀にたえません。

本大会にお集りの諸君は、それぞれの職場、事業所は異りましても、少林寺拳法という目的を同じくした『拳禅一如』のきびしい修練の場を通じて、自己の確立を図るとともに円満で良識ある社会人となるべく研鑽努力を続けておられる素晴らしい仲間達です。

若い拳士諸君が、仕事を終えてから僅かな時間を少林寺拳法の技に汗し、進んで若者の先頭に立ち、お互いに鍛えあい学びあい、その中から人間としての友情を深めあうということは、誠に意義深いことであり、この様な場から必ずや、あすの日本を担う立派な人材が生み出されるものと確信致します。

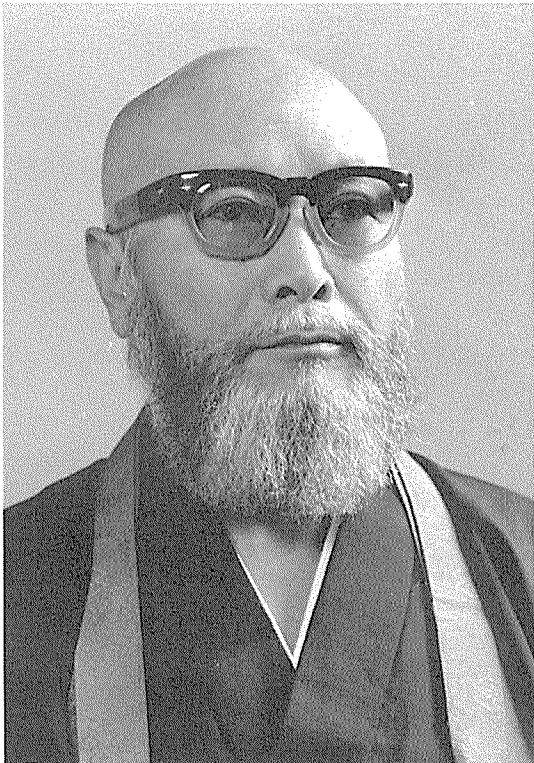
今日、高度な物質文明の発展は、確かに私達の衣・食・住の豊かさをもたらしてくれました。しかしそれに反比例するかの如く、精神文化の低迷・混乱は、ともすれば享楽主義や、自分を見失った行動に走り、しばしば巷に起る非行等の増加は深刻な社会問題となっております。

この様な社会に於いて必要なことは、強固な精神力と強靭な肉体、そして眞の人間愛と正義感でありさらには、それ等を実行できる自信と行動力であると思うのであります。

少林寺拳法が礼節を重んじ、力愛不二の基調の上に立っていることは今更いうまでもありませんが、単に武技の修練のみならず、自己を確立し、円満なる人格の養成、自他共栄を目指していることを思う時、今日の日本社会において少林寺拳法の振興が一層必要であることを痛感するものであります。

本日、ここに集う実業団拳士諸君は、少林寺拳法の持つこの精神を正しく理解され、積極的な修練を通して、身心の鍛磨をはかり、新しい時代を担う先導者たらんと切に希うものであります。

本大会にあたり、日頃鍛磨された技と心をもって、少林寺拳法の真髓を遺憾なく發揮せられるとともに、今後益々『拳禅一如』『力愛不二』の精神に徹し、眞の人づくりの道に精進されんことを念願して私の挨拶と致します。



御挨拶

少林寺拳法創始者

社団法人 日本少林寺拳法連盟会長
宗教法人 金剛禪総本山少林寺管長

師家 宗道臣

本日、ここに日向方齋先生を大会長にお迎えして1979年度少林寺拳法実業団全国大会が盛大に挙行されますことは、この道の創始者として、まことに慶賀にたえません。

本大会の開催にあたり、御協力賜わった有志各位と、尽瘁せられた関係者各位に対し衷心より敬意と感謝を捧げる次第であります。

私が少林寺拳法を日本に移植しましてから、はや30余年になります。この間私はたえず少林寺拳法は人間完成のための「行」であって、単なる武道やスポーツでないと主張しつづけてまいりました。すなわち、勝敗を目的とせず互いに拌みあいながら共に上達を図る少林寺拳法の修行によって、人間存在の尊厳を見つけ、うねぼれでない自信を身につけるとともに、人を立てることと、助けあうことをおぼえ、それを日常生活のなかに生かすこと、それでこそ「行」だといえるからであります。「半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せを」をモットーとし、日本民族の精神改造運動の手段としてはじめたこの少林寺拳法が多くの純粹多感な青少年の共感を呼び、真剣な修行によって体得した技術と生き方が、人づくりの手段として次第にその輪をひろげ、いまや全国津々浦々はもとより、海外にも大きく飛翔し発展している事実を見ますとき、私の実践が誤まっていたなかったという確信をいよいよ深くしております。

いま、私は多くの法縁に囲まれて無上の生甲斐を感じております。この巨億の財を積んでもなお手に入れ難い充実感を支えとして、さらに一人でも多くの有為の若者を育てることに、残された余生を捧げつくす覚悟であります。

本大会に集われた諸君が、今後いっそう人間完成の道に精進し、それぞれの地域や職場、学校に於いて、明るく平和な社会を築くための実践活動に挺身されんことを念願して御挨拶といたします。

大 会 宣 言

私達実業団少林寺拳法の拳士は、金剛禪総本山少林寺の標榜する、拳法を通じて厳しく自己を調御して、金剛の肉体と不屈の精神を養う「自己確立」の道と、その拳法を通じて出来た仲間たちと固く手を取りあいながら、小さな善意をみんなで実践する幸福運動を母体とした「自他共栄」の道と、この二つにして一つの悟道を、各々の職場の中で極めんものと、ひたすら修行に邁進いたしております。

この認識のもとに、日夜練磨した易筋行の妙技を示さんと、今日このように力強く結集いたしました。もとより今大会は演武の巧拙を競うのが目的ではなく、この大会に各界より寄せられた深い御理解と大きな期待を原動力として、いよいよ意欲満満、拳禪一如の修行に励んで人格の陶冶に努める一方、職域に於ける幸福運動の先兵として、青年の先頭に立ちたいと思います。

さらには、日本人として誇りをもち、民族愛を基調とした祖国の興隆と、世界の平和に貢献出来る人間に成長する事を、ここに心から誓うものであります。

大 会 式 次 第

第一 部 決 勝

第二 部 開 会 式

来賓入場

選手入場

開会宣言

太 鼓

奉納演武

鎮 魂

大会宣言

国旗入場

国歌斉唱

大会長挨拶

来賓祝辞

大会委員長挨拶

特別演武

師家法話

全拳士による団体演練

演 武

各部の優勝演武発表

閉 会 式

表 彰

審判団総評

少林寺拳法の歌合唱

国旗退場

閉会宣言

プラスバンド……陸上自衛隊第七普通科連隊音楽隊

指揮者 下元照男

大 会 役 員

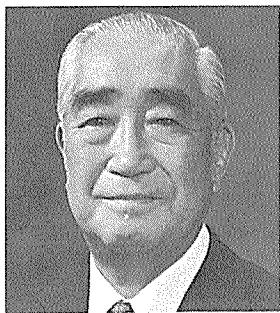
大会会長	日 向 方 齊	少林寺拳法関西実業団連盟会長 関西経済連合会々長、住友金属工業 ^鑑 取締役会長
大会副会長	遠 藤 政 夫	少林寺拳法全日本実業団連盟副会長 参議院議員
"	小 川 鍛 傅	少林寺拳法関西実業団連盟副会長 松下電器産業 ^鑑 社会業務本部常任顧問
"	川 勝 傅 史	大阪府少林寺拳法連盟顧問 南海電気鉄道 ^鑑 取締役社長
"	平 野 博	少林寺拳法東海実業団連盟会長 日本電装 ^鑑 取締役社長
"	安 田 博	大阪府少林寺拳法連盟顧問 大阪瓦斯 ^鑑 取締役社長
大会委員長	小 南 曠	少林寺拳法関西実業団連盟副会長 鑑神戸製鋼所 取締役副社長
大会特別顧問	竹 田 恒 德	国際オリンピック委員会委員 社団法人 日本少林寺拳法連盟総裁
"	江 崎 真 澄	日本少林寺拳法振興会々長 日本少林寺拳法振興議員連盟会長 衆議院議員
"	藤 川 一 秋	少林寺拳法全日本実業団連盟会長 トピー工業 ^鑑 会長 参議院議員
"	松 平 賴 明	社団法人 日本少林寺拳法連盟副会長 少林寺拳法全国高等学校連盟会長
少林寺拳法創始者	宗 道 臣	社団法人 日本少林寺拳法連盟会長 宗教法人 金剛禪總本山少林寺管長
大会名誉顧問	芦 原 義 重	関西電力 ^鑑 代表取締役会長 関西経済連合会名誉会長
"	永 野 重 雄	新日本製鉄 ^鑑 取締役名誉会長
"	松 下 幸 之 助	松下電器産業 ^鑑 取締役相談役

大 会 顧 問

(五十音順)

長員

遊	津	孟	松下電器産業鑑 顧問	中	馬	弘毅	大阪府少林寺拳法連盟顧問 前衆議院議員
井	伊	直	彦根市市長	張	廖	富源	大阪府少林寺拳法連盟顧問 大阪華僑總会会长 江滋貿易鑑社長
石	井	甲	少林寺拳法全日本実業団連盟顧問 労働省職業訓練局長	中	田	明正	豊天山閣 代表取締役社長
石	井	一	神戸市少林寺拳法連盟顧問 衆議院議員	中	田	敬次	加古川市市長
植	木	光	京都府少林寺拳法連盟顧問 参議院議員	中	田	定士	少林寺拳法全日本実業団連盟顧問 身体障害者雇用促進協会理事
上	田	繁	奈良県少林寺拳法連盟顧問 奈良県副知事	中	田	三次郎	門真市市長
宇	治	田	和歌山市市長	永	末	英一	京都府少林寺拳法連盟顧問 衆議院議員
小	野	昌	日本少林寺拳法連盟顧問 弁護士 医学博士	服	部	安司	奈良県少林寺拳法連盟顧問 衆議院議員
大	島	島	大阪市市長	林	田	悠紀夫	京都府知事
大	宮	隆	京都府少林寺拳法連盟顧問 宝酒造鑑 取締役社長	馬	場	猪太郎	前衆議院議員
大	谷	一	大阪府少林寺拳法連盟顧問 元住友化学工業鑑社長	原	田	憲	大阪府少林寺拳法連盟顧問 前衆議院議員
奥	五	一	西宮市市長	藤	本	孝雄	日本少林寺拳法武道専門学校校長 前衆議院議員
奥	野	誠	奈良県少林寺拳法連盟顧問 衆議院議員	船	橋	求己	京都市市長
坂	谷	志	和歌山県知事	坊		秀男	衆議院議員
木	崎	正	守口市市長 全国市長会相談役	丸	野	勲	少林寺拳法全日本実業団連盟顧問 東京都職業安定部長
岸				望	月	三郎	大阪府労働基準局長
北	牧	一	大阪府知事	森	下	泰	大阪府少林寺拳法連盟顧問 参議院議員
小	林	庄	枚方市市長	安	川	寛	安川電機鑑 取締役会長
坂	井	時	関西電力鑑 取締役社長	山	岡	憲一	東京重機工業鑑 代表取締役会長
笛	本	誠	兵庫県知事	山	崎	俊二	少林寺拳法鉄鋼連盟顧問 住金鋼材工業鑑 常務取締役
左	藤	恵	大阪府少林寺拳法連盟顧問 衆議院議員	山	下	利元	滋賀県少林寺拳法連盟顧問 衆議院議員
猿	丸	吉	猿丸地所鑑 会長 元芦屋市市長	山	田	勇	大阪府少林寺拳法連盟顧問 参議院議員
重	富	敏	茨木市市長	山	本	造有	海南市市長
鈴	木	富	大阪府少林寺拳法連盟顧問 大阪市野外活動指導者連盟会長	湯	川	宏吉	大阪府少林寺拳法連盟顧問 衆議院議員
武	村	正	滋賀県知事	吉	田	三七雄	大阪府少林寺拳法連盟顧問 鑑ホテルプラザ常任監査役
谷	口	隆	少林寺拳法全日本実業団連盟顧問 労働省大臣官房長				



祝辭

大会特別顧問

国際オリンピック委員会委員
社団法人 日本少林寺拳法連盟総裁

竹田恒徳

本日ここに、少林寺拳法実業団全国大会が関係各位の絶大なる熱意によりましてかくも盛大に開催されますことは、誠に喜びに堪えない次第でございます。

拳禪一如のきびしい修練を通して身心ともに逞ましい青少年を育成し「人づくり」によって自他共栄の理想社会をうち建てようとする少林寺拳法が、宗道臣師家により我国に根づいて早くも32年の歳月が経過いたしました。そして今日では少林寺拳法の在り方が多くの人々の共感を呼び、極めて順調な発展を続け80数万に及ぶ青少年が自信と勇気に培われた行動力をもって、この道に精進されている姿を見る時、誠に頼もしい限りに思います。

そして今春、宗師家の嵩山少林寺への43年振りの里帰りも実現され、この内外通じての隆盛発展はまさに目を見はるものがあります。また全日本実業団連盟の発足以来10年を迎えた今日、全国の職域内にあって修行を積む実業団支部も年々の増加をたどり、160余支部を見るに至ったことも力強いものがあります。この記念すべき本大会を機に益々と精進され、職域社会に有為なる人材としての成長と活躍を期待しますとともに、今後の実業団連盟の発展を祈念し挨拶といたします。



祝辭

大会特別顧問

日本少林寺拳法振興会会长
日本少林寺拳法振興議員連盟会長
衆議院議員

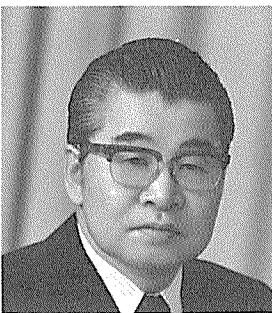
江崎真澄

本日ここに少林寺拳法実業団全国大会が、かくも盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

今日、少林寺拳法が企業はじめ官公庁にまで広く普及し、順調な発展を遂げつつある姿を見ますとき、現在の混乱する世情に照して、心から喜びに耐えない次第であります。少林寺拳法が申すまでもなく拳禪一如、力愛不二を基調として、単なる武道の修練ではなく精神の安定と円満なる人格の養成を目指し自己確立、自他共栄、人造りの道をモットーとする真の武道の在り方を如実に示していることが、現在のごとき隆盛発展を見るに至っているのであります。

偉大な指導者、宗先生の心を体得して、この素晴らしい教えを再確認し、平和で豊かな生活を確立する為に、拳士一人一人が立派な社会の指導者としての資質を持つようにされながら優秀な後進を育ててもらいたいと思います。この大会が集約された拳士諸君の日頃の成果であるならば、その成果を今後において、いかに多くの人々の為に、そして企業の正しい発展の為に生かしてゆくかを考えることこそ本大会の真の意義とするものであろうと思うのであります。

今後の拳士諸君の益々の精進と実業団連盟の発展を祈念しまして挨拶といたします。



祝　　辞

大会特別顧問

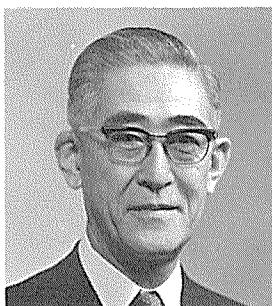
少林寺拳法全日本実業団連盟会長
トピー工業株式会社会長
参議院議員

藤　　川　　一　　秋

本日、ここに第三回少林寺拳法実業団全国大会が、各界の方々の絶大なる御支援によりまして開催されることは、全国実業団連盟会長として、誠に喜びに堪えない次第であります。昨年は少林寺拳法創立30周年記念全国大会が、日本武道館に於て盛大に開催されました。実業団連盟も発足して本年で10周年を迎え、着実に発展して行くのを目のあたりに見るに、感無量の思いがいたします。

今日の流動激しい時に際し、実社会に活躍する拳士諸君が、人類共存の哲理を踏まえて一堂に会することの意義は誠に大なるものがあると信じます。さて人間福祉のための国づくりが、やかましく呼ばれておりますが、国づくりは本来、人づくりから始まるべきものであり、これが国づくりと調和するところに眞の成果が生れるものであります。たくましい青少年を育成して、その中から多くの人材が輩出されるところに社会の発展があるとも云えましょう。

拳法の説く「自己確立」「自他共栄」こそ人づくりの基調であり、幸福社会の真髄でもあります。出場の拳士諸君は日頃練磨された心技を余すところなく充分に發揮され、不動の精神を会得していただきたいと思います。さらに今後もそれぞれの職域において拳憲一如の実践を通して、福祉社会の建設と平和の確立のために献身されんことを切に願うものであります。



祝　　辞

大会特別顧問

社団法人 日本少林寺拳法連盟副会長
少林寺拳法全国高等学校連盟会長

松　　平　　頼　　明

ここに少林寺拳法実業団全国大会が盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。少林寺拳法の精神が多くの方々に理解され今や青少年育成の大きな推進力として発展し期待されておりることは、日頃の拳士諸氏の真摯なご努力の賜と心から敬意を表する次第であります。申すまでもなく少林寺拳法は単なる武道やスポーツではなく、宗門の「行」としての在り方が多くの人々に共鳴を呼ぶところとなり、全国の実業団支部連盟におかれても、それぞれ今日のごとき隆盛を迎えたものであることは言を待ちません。

拳士諸氏は日々の職務を全うされた後、寸暇をさいて修行に精励され自己確立を図りながら、幸福運動を推進して理想社会建設にと純真な力をそそぎ、職域、社会に有為なる人材となるべく為にひたむきに励まれている姿を見る時、限りなき力強さを感じます。どうぞ今後とも益々精進され社会の為になくてはならない人になっていただきたいと念願いたします。

本大会開催に尽力して下さった関係者のみなさまに敬意を表しますとともに、実業団連盟が益々大きく飛躍されますよう切望してごあいさつといたします。

御 挨 捶



大会委員長

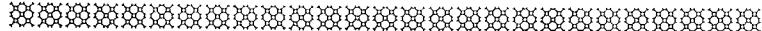
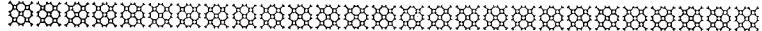
株式会社神戸製鋼所取締役副社長
少林寺拳法関西実業団連盟副会長

小 南 曠

本日ここに少林寺拳法実業団全国大会を開催することができましたことは、御来場の皆様は申すにおよばず、拳法の本質に御理解をいただいている全国の有志の方々の温かいご支援の賜と深く感謝致しております。

『拳法の本質は日常の行為の中に「拳禪一如」「自他共栄」の実を結ばせることにある』ということは当然のことですが、その中で一つの節としてこのような大会を開き、日常の訓練の状態を見て戴くことも意義あることと思います。

私達は本日の大会に於て、日頃の訓練の結果を十分に発揮させるつもりでございます。人々の心がとかく軽薄に流れがちな今日、私達の精神的な成長こそ最も重要なことに信じ、お互いに相助け合いながら一步一步前進してゆくことを誓って、簡単ですが私の挨拶と致します。



大会参与

(五十音順)

大阪
 青木 節夫 松下産業機器(株)社長
 浅井 文男 浅井研磨工業所代表者
 朝倉 栄三 松下産業機器(株)配電器(事)事業部長
 足立 光二 足立製作所代表者
 荒川 長太郎 シンコー化成工業所
 石河 澄夫 イシコ金属工業(株)代表取締役
 石原 勝 少林寺拳法松下茨木支部顧問
 市川 武憲 松下電器産業(株)テレビ(事)生産技術課長
 井出 義喜 (株)井出商店代表取締役
 伊藤 正喜 (株)伊藤機工商会代表取締役
 井波 恒範 井波鉄工所代表者
 井上 泰治 泰明鉄工所代表者
 今井 芳彦 いまい印刷(株)代表取締役
 植本 要次郎 光洋電機工業(株)常務取締役
 大井 章司 松下産業機器(株)代表取締役
 大田 竣司 (株)大田製作所代表取締役
 大友 康亘 大阪府府議会議員
 岡田 勇 近畿電気工事(株)大阪支社長
 尾西 義数 尾西電機(株)社長
 甲斐 弘善 済土宗大阪教区議長
 笠井 明博 笠井木型製作所代表者
 金本 敏 嵐屋川市市議會議員
 唐沢 進 少林寺拳法松下豊中支部顧問
 神田 卓明 松下産業機器(株)人事部長
 菊地 瑞穂 菊地製作所代表者
 岸田 正一 味一番代表者
 岸本 留夫 豊中市民生部組合支部長
 北井 清 高槻市市議會議員
 久保 昭太郎 (株)久保商店代表者
 河野 只雄 松下電工(株)拳法部監督
 事口 孝男 上六市街地再開発組合事務局長
 小橋 昇 (株)ファルコン代表取締役
 小林 光夫 光栄鋼機社長
 小森 清司 松原印刷社長
 小矢田 幸雄 茨木市市議會議員
 小笠 進 (株)進和鉄工所社長
 近藤 栄次郎 近藤印刷(株)代表取締役
 重野 忠男 重野工機(株)代表取締役
 柴田 周良 新東洋空調(株)代表取締役社長
 島田 豊彰 島田研磨工業所代表者
 清水 正弘 豊中市市議會議員
 杉本 秋一 豊中市役所民生部次長
 鈴木 啓敬 鈴木商会代表者
 高畑 敬一 松下電器産業労働組合中央執行委員長
 滝 澄夫 滝研磨工業所代表者
 龍本 和夫 松下産業機器(株)電子機器(事)事業部長
 武田 秀孝 学校法人武田学園
 田中 義二 関西鍼灸柔整専門学校理事長
 谷口 竹完 双葉電気通信(株)代表取締役
 植上 一馬 松下産業機器(株)溶接機(事)事業部長

辻 師朗 辻美堂代表者
 坪井 輝夫 松下電器産業(株)テレビ(事)事業部長
 戸田 文夫 松下電工(株)人事部労政課長
 中出 武志 ビルト住設工業(株)代表取締役社長
 中西 兵二 中西不動産事務所所長
 中森 安雄 中森スプリング製作所代表者
 成實 豊二 大阪府高等學校少林寺拳法連盟会長
 西田 道男 五十鈴觀光(株)専務取締役
 西村 宇多茂 松下産業機器(株)取締役
 野上 福秀 大阪府府議會議員
 榎口 剛俊 (株)日本オートム取締役
 橋川 隆一 東洋興業(株)専務取締役
 林田 重信 大阪マツダ販売(株)東成営業所所長
 原田 親義 北方領土返還促進関西センター事務局長
 藩士 義 錦城閣社長
 藤田 眞枚方市市議會議員
 舟橋 孝夫 松下電器産業(株)取締役
 細野 勇 交野市市議會議員
 細見 二郎 日本精機(株)代表取締役
 前山 博行 前山研磨工業所代表者
 松浦 敬一 松下労働組合茨木テレビ支部支部長
 松岡 昭二 大栄ゴム(株)常務取締役
 松村 史郎 住金海運(株)常務取締役
 松元 正志 フォーク総合作業社長
 松本 衛 (株)大阪府職業訓練協会専務理事
 丸田 正弘 丸正製作所代表者
 三澤 昭雄 三澤綾維(株)専務取締役
 水嶋 道雄 (株)共榮堂取締役社長
 南出 正 守口市市議會議員
 宮原 厚 松下電器産業(株)役員室室長
 宗本 光義 松下産業機器(株)コンデンサ(事)事業部長
 村田 幸雄 あけの代表者
 森 瑛 松下電器産業(株)テレビ(事)人事部長
 安井 修己 豊能町議會議員
 安田 廉三 安田商事(株)代表取締役
 山崎 一義 山崎機工代表者
 山崎 重夫 (株)山崎モータース代表取締役
 山崎 末金 山崎ビル代表者
 山田 正 松下産業機器(株)取締役
 山中 一敏 少林寺拳法関西山崎・吹田支部顧問
 山中 純雄 松下電工(株)人事部長
 山本 三郎 (株)亀谷塗装店代表取締役
 山本 英雄 (株)土居代表取締役
 吉尾 實 松下電工(株)拳法部部長
 吉田 敏夫 吉田精機社長
 吉本 与一郎 よし本代表者
 京都 岩本 ひろし 京都市市議會議員
 梅原 文雄 宇治市市議會議員
 岡島 昇平 丸増(株)取締役
 川上 徹 陶芸家

大会参与

(五十音順)

嘉 村 史 郎 松下コンデンサ支部顧問
 熊 谷 俊 彦 丸増(株)専務取締役
 国 宗 久 光 松下労組宇治支部長
 倉 田 実 丸増(株)取締役
 小 谷 稔 栄光時計(株)取締役社長
 坂 口 繁 藏 (株)坂口塗料店社長
 高 野 昭 (株)タカノ代表取締役社長
 田 上 勝 也
 竹 山 治 男 丸増(株)取締役
 辰 巳 望
 津 田 幹 雄 京都市会議員
 鶴 田 利 雄 ツルタ電機(株)取締役社長
 長 田 修 元松下コンデンサ支部長
 中 野 人 来 丸増(株)取締役
 正 木 幸次郎 丸増(株)専務取締役
 松 井 かつえ 日中友好京都婦人文化會議議長
 松 原 毅 丸増(株)取締役
 丸 山 增 蔵 丸増(株)取締役社長
 村 田 省 藏 宇治市会議員
 湯 浅 平三郎 (株)湯浅保三商店代表取締役
京都団体
 内外物産株式会社

兵庫

足 立 早 苗 島文工業(株)取締役
 阿 部 浩 之 島文工業(株)常務取締役
 五十嵐 努 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所工程部長
 稲 岡 稔 日清鋼業(株)部長
 今 岡 照 泰 島文工業(株)取締役
 今 西 永 児 西宮市議会議員
 井 宮 敏 彦 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所工作部長
 上 田 祐 稔 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所常務部長
 江 口 公 一 少林寺拳法神鋼神戸支部相談役
 太 田 博 関西技術コンサルタント(株)社長
 大 塚 隆 (株)神戸製鋼所中央研修所担当次長
 大 西 稔 泰 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所製鋼担当部長
 越 智 精 一 神戸寿鉄工(株)工作部長
 越 智 泰 二 滝川工業(株)常務取締役
 小 野 勝 雄 西宮市教育委員長
 川 口 康 平 神鋼プラント建設(株)取締役業務部長
 河 内 昭 太 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所工作部長
 川 本 清 神戸寿鉄工(株)工事部長
 喜多村 実 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所製鋼部長
 喜多山 正 範 加古川市議会議長
 黒 木 明 人 日清工業(株)加古川支店常務課長
 桑 原 宏 三菱電機(株)伊丹製作所開閉機器製造部長
 叶 野 元 己 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所技術担当部長
 佐 伯 修 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所常務取締役所長
 鈴 木 昭 男 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所副所長
 滝 川 松 男 滝川工業(株)取締役社長
 田 口 和 正 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所製鉄部長
 伊 達 義 孝 (株)山田屋代表取締役社長

田 中 琢 磨 神鋼プラント建設(株)常務取締役総務部長
 田 中 宏 樹 滝川工業(株)専務取締役
 田 中 政 孝 神鋼プラント建設(株)常務取締役工事本部長
 田 村 八 郎 神戸寿鉄工(株)取締役
 富 永 正 太 郎 三菱電機(株)伊丹製作所副所長
 豊 岡 正 見 加古川市教育長
 永 井 親 久 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所製銑製鋼部長
 中 阪 哲 也 (株)神戸製鋼所重機械事業部担当課長
 中 田 八 郎 滝川工業(株)取締役企画室長
 中 村 芳 美 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所条鋼開発部長
 恵 宗 弘 三輪運輸工業(株)専務取締役
 野 原 剛 島文工業(株)取締役
 原 田 久 美 日清鋼業(株)加古川支店業務課長
 日 笠 徹 雄 日笠工業(株)代表取締役
 斎 田 稔 明 三菱電機(株)伊丹製作所常務研修担当課長
 平 野 担 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所技術部長
 深 田 卓 三 (株)塩野鉄工所取締役社長
 福 井 芳 晴 神鋼プラント建設(株)加古川出張所所長
 富 士 煉 三 滝川工業(株)営業課長
 藤 枝 敬 三 神鋼プラント建設(株)取締役社長
 藤 野 治 関西帆布化学防水(株)関西帆布支部顧問
 前 山 武 徳 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所業務部長
 松 永 昭 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所圧延部長
 松 永 寿 男 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所副所長
 松 本 好 雄 きしろ発動機(株)取締役社長
 水 内 通 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所取締役所長
 光 島 昭 三 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所所長付
 南 都 正 幸 日清鋼業(株)加古川支店軌道課長
 宮 本 一 郎 (株)神戸製鋼所加古川製鉄所副所長
 宮 本 豊 島文工業(株)取締役
 三 輪 梅 松 三輪運輸工業(株)会長
 三 輪 武 三輪運輸工業(株)副社長
 三 輪 正 義 三輪運輸工業(株)取締役
 三 輪 吉 郎 三輪運輸工業(株)社長
 森 住 一 郎 神戸寿鉄工(株)取締役社長
 森 勝 延 年 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所圧延部長
 八 木 米 次 西宮市議会議長
 八 谷 晋 (株)神戸製鋼所神戸製鉄所製銑課長
 山 中 和 芳 関西帆布化学防水(株)青木工場工場長
 山 本 正 弥 神戸寿鉄工(株)取締役
 米 田 稔 日清鋼業(株)加古川支店常務取締役支店長
兵庫団体
 少林寺拳法神戸支部連合会
 但馬松下電器株式会社
和歌山
 秋 元 史 光 品川白煉瓦(株)和歌山営業所長
 天 野 隆 史 日本電気機器(株)取締役社長
 五十嵐 陸 雄 川口運輸代表者
 生 熊 倭 少林寺拳法新宮道院顧問
 池 内 祥 晴 住友金属工業和歌山製鉄所エネルギー管理課副長
 池 吉 清 西牧工業(株)和歌山出張所長

大 会 参 与

(五十音順)

部長	伊藤茂	川惣電機工業(株)和歌山當業所長
部長	伊藤博治	鴻池運輸(株)和歌山支店取締役支店長
部長	稻沢勝男	少林寺拳法道院長田辺市議會議員
部長	稻田銳郎	稻田病院院長
長	井上進	東洋通商(株)代表取締役
長	島上武夫	(株)上島鐵工所専務取締役
長	野上績	葵産業(株)代表取締役
長	松上良行	(株)昭和工機代表取締役
長	植村卓郎	少林寺拳法住金和歌山支部顧問 住友金屬工業(株)和歌山製鐵所環境管理部長
課長	上村秀信	(株)大島工業所和歌山支社常務取締役支社長
課長	宇順友三	少林寺拳法住金和歌山支部顧問 和歌山市議會議員
課長	内浦保夫	(株)三共合金營業部部長
課長	江村春夫	江村鉄工所
課長	岡崎明生	(株)高木電機製作所常務取締役
課長	岡本正	海南省体育協会副会長
課長	岡本基	少林寺拳法松江道院顧問 和歌山市議會議員
課長	大久保利三郎	(株)和歌山一誠工作所代表取締役
課長	垣本喜代治	日本商事(株)取締役社長
課長	影山寛通	(株)大月工業和歌山出張所所長
課長	柏木包雄	柏木鉄工(株)代表取締役
課長	勝永修	山崎プラント(株)取締役
課長	川津公博	少林寺拳法住金和歌山支部顧問 (株)山崎組和歌山營業所所長
課長	河野完	(株)有本鉄工所代表取締役
課長	木下政一	(有)大起組代表取締役
課長	喜多正美	三陽物産(株)代表取締役
課長	北山直大	岡崎工業(株)和歌山事業所所長
課長	九鬼清治	笠栄鉄工(株)代表取締役
課長	清重喜一郎	長宅電機工業(株)和歌山出張所所長
課長	久保裕嗣	少林寺拳法白浜道院顧問 白浜町議會議員
課長	黒江進次朗	(有)黒江組鉄工代表取締役
課長	小村公志郎	第一工業(株)取締役社長
課長	斎藤正美	森脇工機(株)和歌山事業所所長
課長	酒本憲一	(有)酒本運輸代表取締役
課長	笛本誠治	(株)湊組代表取締役社長
課長	白井定幸	(株)中北製作所
課長	白石四郎	(株)白石工業代表取締役
課長	新海東洋和	テラダ産業(株)大阪支店支店長
課長	鈴木正章	大弘建材(株)代表取締役副社長
課長	鈴木良雄	鈴木鉄工(株)代表取締役
課長	鈴木芳夫	(有)山和工業代表取締役
課長	鈴木芳治	(株)日章鉄工所代表取締役
課長	高主計	住栄工業(株)代表取締役
課長	高須昭寛	(株)高橋組鹿島支店支店長
課長	高松芳之	少林寺拳法新宮道院顧問 (有)高松製作所代表者
課長	高内正裕	(有)武内組代表取締役
課長	武田進	(株)武田組代表取締役
課長	武田典也	紀州白蓮道院顧問和歌山市議會議員
課長	田尻精治	辰和工業(株)和歌山出張所取締役所長
課長	立花意知子	日新電機工作(株)取締役社長
課長	伊達卓郎	(社)隊友会和歌山支部連合会會長 和歌山県防衛協会事務局長
課長	田中正雄	田中材工(株)代表取締役

谷	口	龍	一	(有)谷口建築代表取締役
玉	置	泰	男	(有)大貴工業代表取締役
谷	村	俊	彦	太田鉄工(株)和歌山支店常務取締役社長
田	渕	利	都	(株)丸山組取締役社長
出	口	旭		七川産業(株)代表取締役
出	口	進		出口歯車工業(株)代表取締役
堂	浦	好	次	西和電器(株)代表取締役
豊	田	六	三	ユタカ工作(株)代表取締役
中	谷	悟		和歌山県少林寺拳法連盟相談役
中	村	直	一	中村合金工業(株)代表取締役
中	島	績		(有)双栄梱包代表取締役
鍋	嶋	勝		(株)辻鉄工所和歌山出張所所長
野	崎	泉		箕組建設(株)和歌山営業所取締役所長
野	田	猛		河西運輸(株)代表取締役
橋	本	俊	美	海南省体育協会理事長
濱	野	菊	次	(有)濱野組代表取締役
原	田	隆	夫	尾部工業(株)和歌山支店支店長
福	寿	照	雄	(有)伊和工業代表取締役
福	原	耕	一	藤足機工(株)代表取締役
前	田	薰		前田石錦工業(株)代表取締役
前	田	茂	則	栗原工業(株)大阪南支店次長兼任金作業所長
松	下	明	義	(株)北山組専務取締役
松	下	嘉	則	旭永工業(株)代表取締役
丸	尾	富	雄	ミクロ計測器(株)代表取締役
南				少林寺拳法海南連合会会長
鋒	山	三	郎	宮原工業(株)和歌山営業所所長
三	土	正	美	日本特殊炉材(株)関西支社取締役支社長
宮	本	隆	夫	河北自動車整備工場事業主
向	井	行	雄	東洋橋査工業(株)代表取締役
室	澤	忍		大阪富士工業(株)和歌山支店長
森	下	実	雄	森下鉄工(株)代表取締役
森	田	久	子	(株)一誠工作所代表取締役
山	本	利	之	(株)小橋組取締役
吉	岡	秀	典	(株)鉄昌社和歌山出張所所長
米	田	隆	一	米田鋼機(株)代表取締役
渡	瀬	輝	彦	④工機代表者
和	田	久	雄	湊商事(株)取締役社長
和歌山団体				
株式会社紀の川鉄工所				
近畿電気工事株式会社				
住友精密株式会社				
株式会社北辰電機製作所大阪支店				
山武ハネウエル株式会社大阪営業所				
北海道				
木	村	勘	志	北見道院顧問北見市少林寺拳法協会長
竹	下	正	一	美幌町少林寺拳法協会長 美幌自衛隊支部顧問
北海道団体				
少林寺拳法北海道連合会				
関	東			
池	田	邦	輔	永和産業(株)代表取締役
沢	田	睦	夫	首都高速道路公團部長

吉賀 漢和和兵 芦加良少兵高

青青浅芦足阿有安石石汎伊市市井井今岩入氏櫻櫻大大大區尾奧御御垣加根川月河

大会参与

(五十音順)

常	白	直	久	勇	住友金属工業(株)鹿島製鉄所 常磐県会体育部部長
慶	川	永	浩	康	少林寺拳法鹿島港道院顧問 鹿島町議會議員
末	田	中	幹	男	日本電信電話公社関町電話局局長
堀	堀	中	一	山崎組鹿島營業所所長	(株)山崎組鹿島營業所所長
間	尾	中	峻	住友金属工業(株)鹿島製鐵所勤務部部長	住友金属工業(株)鹿島製鐵所勤務部部長
静	岡	渡	辺	虎	雄 (株)ヨシケイ浜松代表取締役
静岡団体					(株)ヨシケイ浜松
東海					石塚 義信 アイシンワーナー(株)安全衛生環境部部長
齊	藤	暁	一	(株)スチールセンター取締役	杉 原 春樹 アイシンワーナー(株)取締役
山	本	惠	一	本田技研工業(株)鈴鹿工場所長風会理事長	日本電装少林寺拳法部部長
磯	村	陸			日本電装安全衛生環境部部長

大会賛助

(五十音順)

阿	井	生	石	乾	岩植	大岡	小槽	小佐	清白	杉田	玉	柘	葛	阪	梯	正勝	信	三絃	秀雄	勤郎	一久夫	助	雄己	雄彦	悦	三義	一広二	英威	勇郎	弘	二保代	雄正	之進	美子	造一幸			
井	見	井	井	植	大岡	小岡	小槽	佐	白	田	玉	葛	葛	阪	梯	正勝	信	五喬	義日	要久勝	泰和	博省	明秀	良健	好	敬治	誠	照文	幸正	敏麻	修孝	良	弘	二保代	雄正	之進	美子	造一幸
井	井	井	井	植	大岡	小岡	小槽	佐	井	井	井	葛	葛	阪	梯	正勝	信	五喬	義日	要久勝	泰和	博省	明秀	良健	好	敬治	誠	照文	幸正	敏麻	修孝	良	弘	二保代	雄正	之進	美子	造一幸
井	井	井	井	植	大岡	小岡	小槽	佐	井	井	井	葛	葛	阪	梯	正勝	信	三絃	秀雄	勤郎	一久夫	助	雄己	雄彦	悦	三義	一広二	英威	勇郎	弘	二保代	雄正	之進	美子	造一幸			
井	井	井	井	植	大岡	小岡	小槽	佐	井	井	井	葛	葛	阪	梯	正勝	信	三絳	秀雄	勤郎	一久夫	助	雄己	雄彦	悦	三義	一広二	英威	勇郎	弘	二保代	雄正	之進	美子	造一幸			

司義明夫忠幸則行昶夫

邦芳久喜敏義利則

野田本岡下本

東河島西浜松松宮森山

博史体ト組学部会院

好晃団シエ村

森川海太田村

新安東株川中少浜浜

CBモーター(株)黒江少年白蓮会後援会

一助吏夫子美臣二

栄光榮功良博勝一德海健次郎貢潔

谷木中沢嶺岡内崎本東木藤野

渋鈴田永永平宮山山

一俊計彦徹洋彦良昭

男宏志志武徳門マ美

根閥上万野藤口久

栗林和歌山吉和

久保田藤右衛門タ広

井緒小加川佐々佐

高砂道院拳士会

芦屋道院拳士会

加古川市役所剣道部

昆陽道院拳士会

少林寺拳法連盟

高砂鹿島道院拳士会

高砂道院拳士会

夫一郎雄力悦体

富健二末富團吉脇鷲和和兵

本丸尾田田田庫和和兵

源英本上田田木口直浩

浦岡谷原堀正山山吉和

和歌山源英本上田田木口直浩

和歌山源英本上田田木口直浩

和歌山源英本上田田木口直浩

幸明

大会贊助

(五十音順)

道院長・支部長

弘

奈良王子道院長

河川原辺二

白浜道院長

河川河川真義二

大將軍道院長

河川河川芳孝二

浜松中央道院長

河川木貴二

大阪田辺道院長

河川木貴三

海南巽道院長

河川木貴四

京都商業高校支部長

河川木貴五

洛新道院長

河川木貴六

此花道院長

河川木貴七

小栗栖道院長

河川木貴八

枚方道院長

河川木貴九

昆陽道院長・阪神百貨店支部長

河川木貴十

大阪城東道院長

河川木貴十一

野田道院長

河川木貴十二

新宮・南紀勝浦道院長

河川木貴十三

竜華スポーツ少年団支部長

河川木貴十四

御坊道院長

河川木貴十五

奈良王子道院長

河川木貴十六

白浜道院長

河川木貴十七

大將軍道院長

河川木貴十八

浜松中央道院長

河川木貴十九

大阪田辺道院長

河川木貴二十

海南巽道院長

河川木貴二十一

京都商業高校支部長

河川木貴二十二

洛新道院長

河川木貴二十三

此花道院長

河川木貴二十四

小栗栖道院長

河川木貴二十五

枚方道院長

河川木貴二十六

昆陽道院長・阪神百貨店支部長

河川木貴二十七

大阪城東道院長

河川木貴二十八

野田道院長

河川木貴二十九

新宮・南紀勝浦道院長

河川木貴三十

竜華スポーツ少年団支部長

河川木貴三十一

御坊道院長

河川木貴三十二

奈良王子道院長

河川木貴三十三

白浜道院長

河川木貴三十四

大將軍道院長

河川木貴三十五

浜松中央道院長

河川木貴三十六

大阪田辺道院長

河川木貴三十七

海南巽道院長

河川木貴三十八

京都商業高校支部長

河川木貴三十九

洛新道院長

河川木貴四十

此花道院長

河川木貴四十一

小栗栖道院長

河川木貴四十二

枚方道院長

河川木貴四十三

昆陽道院長・阪神百貨店支部長

河川木貴四十四

大阪城東道院長

河川木貴四十五

野田道院長

河川木貴四十六

新宮・南紀勝浦道院長

河川木貴四十七

竜華スポーツ少年団支部長

河川木貴四十八

御坊道院長

河川木貴四十九

奈良王子道院長

河川木貴五十

白浜道院長

河川木貴五十一

大將軍道院長

河川木貴五十二

浜松中央道院長

河川木貴五十三

大阪田辺道院長

河川木貴五十四

海南巽道院長

河川木貴五十五

京都商業高校支部長

河川木貴五十六

洛新道院長

河川木貴五十七

此花道院長

河川木貴五十八

小栗栖道院長

河川木貴五十九

枚方道院長

河川木貴六十

昆陽道院長・阪神百貨店支部長

河川木貴六十一

大阪城東道院長

河川木貴六十二

野田道院長

河川木貴六十三

新宮・南紀勝浦道院長

河川木貴六十四

竜華スポーツ少年団支部長

河川木貴六十五

御坊道院長

河川木貴六十六

奈良王子道院長

河川木貴六十七

白浜道院長

河川木貴六十八

大將軍道院長

河川木貴六十九

浜松中央道院長

河川木貴七十

大阪田辺道院長

河川木貴七十一

海南巽道院長

河川木貴七十二

京都商業高校支部長

河川木貴七十三

洛新道院長

河川木貴七十四

此花道院長

河川木貴七十五

小栗栖道院長

河川木貴七十六

枚方道院長

河川木貴七十七

昆陽道院長・阪神百貨店支部長

河川木貴七十八

大阪城東道院長

河川木貴七十九

野田道院長

河川木貴八十

新宮・南紀勝浦道院長

河川木貴八十一

竜華スポーツ少年団支部長

河川木貴八十二

御坊道院長

河川木貴八十三

奈良王子道院長

河川木貴八十四

白浜道院長

河川木貴八十五

大將軍道院長

河川木貴八十六

浜松中央道院長

河川木貴八十七

大阪田辺道院長

河川木貴八十八

海南巽道院長

河川木貴八十九

京都商業高校支部長

河川木貴九十

洛新道院長

河川木貴九十一

此花道院長

河川木貴九十二

小栗栖道院長

河川木貴九十三

枚方道院長

河川木貴九十四

昆陽道院長・阪神百貨店支部長

河川木貴九十五

大阪城東道院長

河川木貴九十六

野田道院長

河川木貴九十七

新宮・南紀勝浦道院長

河川木貴九十八

竜華スポーツ少年団支部長

河川木貴九十九

御坊道院長

河川木貴一百

奈良王子道院長

河川木貴一百零一

白浜道院長

河川木貴一百零二

大將軍道院長

河川木貴一百零三

浜松中央道院長

河川木貴一百零四

大阪田辺道院長

河川木貴一百零五

海南巽道院長

河川木貴一百零六

京都商業高校支部長

河川木貴一百零七

洛新道院長

河川木貴一百零八

此花道院長

河川木貴一百零九

小栗栖道院長

河川木貴一百零十

枚方道院長

河川木貴一百零一

昆陽道院長・阪神百貨店支部長

河川木貴一百零二

大阪城東道院長

河川木貴一百零三

野田道院長

河川木貴一百零四

新宮・南紀勝浦道院長

河川木貴一百零五

竜華スポーツ少年団支部長

河川木貴一百零六

御坊道院長

河川木貴一百零七

奈良王子道院長

河川木貴一百零八

白浜道院長

河川木貴一百零九

大將軍道院長

河川木貴一百零十

浜松中央道院長

河川木貴一百零一

大阪田辺道院長

河川木貴一百零二

海南巽道院長

河川木貴一百零三

京都商業高校支部長

河川木貴一百零四

大会贊助

(五十音順)

巽	政	雄	茨木道院長	牧	田	章	一	京都堀川道院長
高	山	恒	一生駒道院長	牧	野	清	西	西陣道院長
高	田	昌	精華道院長	正	永	裕	路北道院長	
達	山	植	太秦道院長	增	原	隆	宮今津道院長	
田	中	道	北清水道院長	松	井	彥	大阪池田道院長	
田	中	輝	龜岡道院長	松	下	邦	大坂東・一丘道院長	
田	辺	眞	高槻道院長	松	本	邦	八尾山城道院長	
谷	谷	勝	鳳道院長	松	本	兼	月輪道院長	
口	口	敏	淀川道院長	道	脇	徳	奥和歌道院長	
脇	脇	誠	和歌山名手道院長	三	前	重	南部道院長	
田	村	武	梅田道院長	三	橋	治	勇	
檀	上	辯	京都松原道院長	溝	川	信	造	
辻	内	正	粉河道院長	溝	口	雅	勝	
土	本	榮	西脇道院長	三	清	勇	利	
土	山	欽	次	矢	利	造	雅	
島	島	正	大阪北道院長	箕	島	治	勝	
中	田	憲	高石道院長	美	田	雄	治	
永	田	昌	千里・新千里道院長	南	井	佐	雄	
永	田	範	白鳳道院長	宮	原	照	一	
永	田	六	朗	山	山	幸	年	
中	塚	貞	針中野道院長	深	和	信	三	
中	西	一	大阪南道院長	三	田	洋	千	
中	野	仁	新屋道院長	村	村	利	年	
長	畑	芳	大淀道院長	森	森	豊	夫	
中	村	和	香里丘道院長	森	下	汪	介	
中	矢	富	八尾志紀・星田道院長	森	川	文	行	
中	山	満	須磨道院長	森	川	蘭	利	
名	田	洲	姫路南道院長	森	田	要	豊	
成	瀬	英	高槻上牧道院長	森	本	孝	東	
西	尾	武	寝屋川道院長	安	川	晃	加	
西	川	孝	八尾山本道院長	安	田	史	古	
西	野	潤	伏見道院長	谷	永	正	古	
西	村	建	南国北陵道院長	安	野	正	川	
西	村	万	住吉道院長	安	岡	輝	道	
西	山	正	多聞道院長	安	崎	実	院	
野	津	敏	宇治道院長	蔽	崎	豊	長	
野	村	元	京央道院長	山	下	豊	か	
長	谷	和	新栄道院長	山	下	和	つ	
谷	川	公	京都中央道院長	山	田	紀	ら	
原	田	義	芦屋道院長	山	崎	武	ぎ	
花	木	信	住之江道院長	山	崎	博	道	
浜	名	浩	神崎川道院長	山	下	通	院	
浜	野	清	鴨川道院長・鴨川少年団支部長	山	田	啓	長	
林	早	嗣	忠岡道院長	山	田	源	た	
平	部	伸	忠岡道院長	大	和	太	か	
平	平	一	八尾太子堂道院長	山	本	孝	ら	
平	野	好	天王寺道院長	山	本	佳	り	
平	野	隆	泉佐野道院長	山	本	伸	ま	
葺	石	泰	田辺道院長	山	本	雄	ま	
福	岡	勝	西宮東道院長	山	本	義	た	
福	庭	五	鳴尾道院長	湯	藤	明	だ	
福	本	寿	豊中・豊中第二道院長	横	田	仁	だ	
藤	木	義	東大阪東道院長	横	山	昭	だ	
藤	木	秀	姫路白鬚・神戸長田道院長	吉	田	泰	海南道院長	
藤	木	義	熊取道院長	吉	田	哲	三木道院長	
藤	本	充	神戸垂水道院長	吉	田	朗	竜華道院長	
文	川	定	堺錦西道院長	吉	垣	寛	山城青谷道院長	
古	谷	繁	金岡道院長	吉	垣	之	同志会支部長	
古	谷	康	堺白蓮道院長	渡	渡	勇	彦根道院長	
細	川	正	紀州白蓮道院長	渡	渡	和		

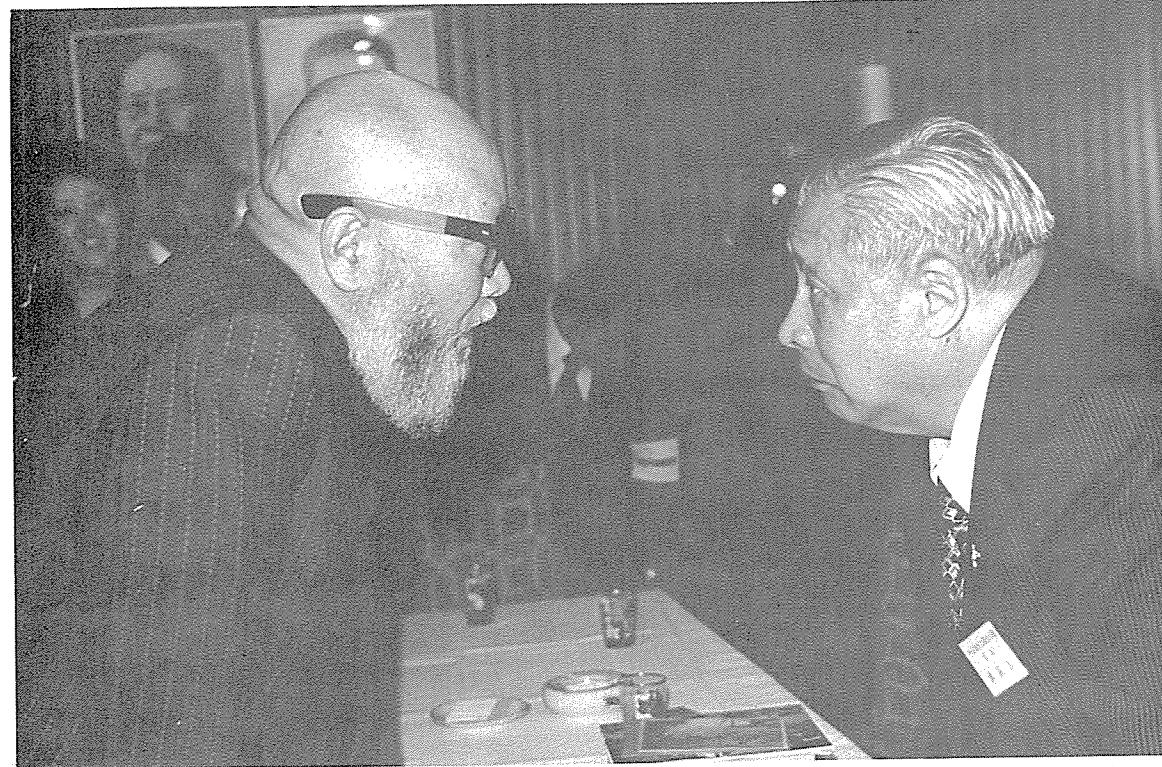
大會協贊會社

(五十音順)

大阪瓦斯株式會社
川崎製鐵株式會社
関西電力株式會社
関西帆布化学防水株式會社
株式會社神戶製鋼所
株式會社金剛社
サントリ一株式會社
三和銀行
新日本製鐵株式會社
住友金属工業株式會社
住友銀行
宝酒造株式會社
大和酒會
株式會社天山閣
東京芝浦電氣工業^{株式会社}姫路工場
南海電氣鐵道株式會社
日本鋼管株式會社
日本電裝株式會社
阪神百貨店株式會社
富士通株式會社
松下電器產業株式會社
丸増株式會社
株式會社湊組
三菱電機^{株式会社}伊丹製作所
株式會社山崎組和歌山營業所

国際的には

日中民間外交の先端をゆく少林寺拳法



1977年5月19日夜「中日友好の船訪日代表団」団長 廖承志中日友好協会会长(右)を東京晴海ふ頭に停泊中の「明華号」に訪ね、「少林寺里帰り」のお礼を述べると共に、お互いの友情を確認しあう宗道臣師家(左)。

両氏の肩には両国民の幾百万、幾千万もの平和への祈りと願いが托されて……
日本の平和の為に！ 中国の平和の為に！ そして日中両国子々孫々に至る永遠の
平和の為に！ 見つめあう目と目。語りあう心と心。

「日本の平和と繁栄はアジアの平和なくしてあり得ない」

「アジアの平和は日本と中国が手を握りあう以外に道はない」

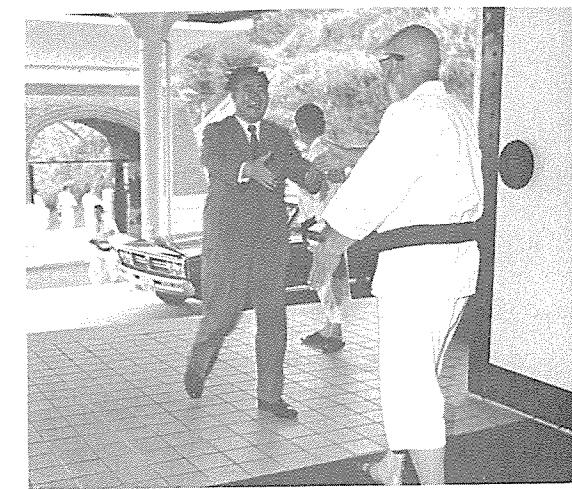
宗道臣師家は、少林寺建立以来33年間のあいだ、事あるごとに我々に呼びつけられ、又、陣頭にたって実践の指揮にあたられてきた。戦時下、中国と敵対関係にあった時も、宗道臣師家は中国人とも常に人間愛を基調とした交際を終始続けられたという。中国から兄弟のような親しさで国賓待遇としてつかわれる理由がここにある。



1979年1月 総本山少林寺の鏡開き式に参列された
駐日中華人民共和国特命全
権大使 符浩閣下。



中国政府より贈られた
大理石の唐獅子。第一
練成道場、第二練成道
場玄関前に鎮座する。



再会。朋あり遠方より來たる。亦樂しからずや。
1977年9月24日 陳抗參事官は、中国武術代表団とともに本部を表敬訪問。



「少林寺拳法は中国の河南省に起り偉大な師がこれを東の國に伝えた。
少林寺と中国の友好は黄河の流れのように源は古く、流れは深く、長く、又、富士山の嶺のように崇高である。」という意味。



43年ぶり 戦後日本で初めての 中国嵩山少林寺へ里帰り

人民日報

RENMIN RIBAO

1979年4月19日 星
水曜己未年三月廿三

廖承志副委員長宴請日本朋友

新華社北京四月十八日电 入大公会副主任委员、中日友协会长廖承志今赴京并拜谒中国少林寺拳法教练官长兼道场团长的中国少林寺拳法教练官长宗道中先生和日本少林寺的朋友为隆重中日友好所作的贡献表示感谢。他连把茶敬给日本朋友并说：“希望你们能经常来中国访问，促进中日两国人民的友谊。”

少林寺拳法教练官长宗道中先生和日本少林寺的朋友

中日友好促进会会长

参加会见和宴会的有中国全国体育总会副主席兼秘书长

“友好促进中日友协”的负责人宋祖德、陈祖德、陈祖德

、周南、洛阳、西安和河南少林寺总寺今天到达北京。

生源部北京。丁伟军摄影于北京

賀賀新聞

HIG YOMIURI SHINBUN

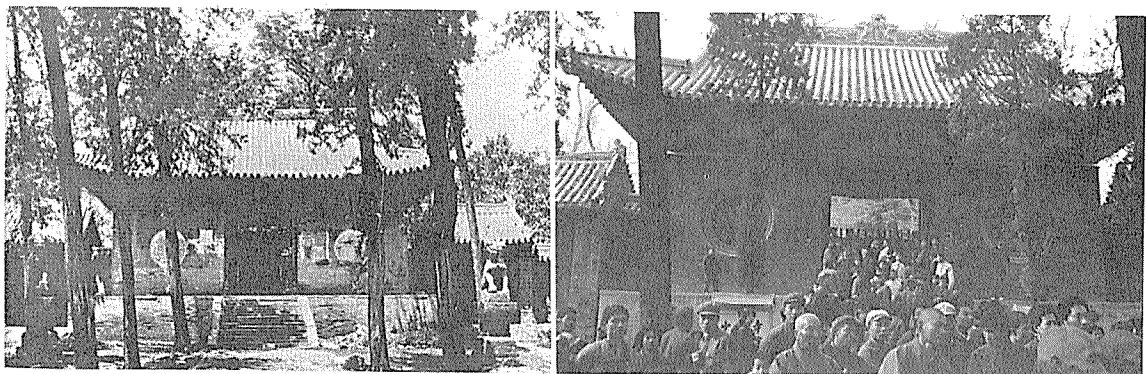
1979年4月19日 金曜日

日本少林寺拳法の開拓・宗氏

若き日の修業地へ

公開式に招かれ
11日に訪中

宗道臣師家、
嵩山少林寺へ
里帰りを第一
面に報じる、
中國人民日報
と読売新聞。



教範に掲載されている昭和初期の嵩山少林寺(左)と、修復なって44年ぶりに宗道臣師家が里帰りされた嵩山少林寺。少林寺拳法を行ずる我々は、教範のこの古い少林寺の写真を見ながら、中国そして師家の青春の修業時代に想いをはせたものである。今、師家がこの新しい少林寺拳法に足を踏み入れられる姿を見て、人間の短い一生になせる事の実に豊かで大いなる可能性を教えてくれることか。



「宗道臣先生 おばえていらっしゃいますか」
「おっ、」宗氏も驚きと喜びで声も出ない(人民中国
6月号より)

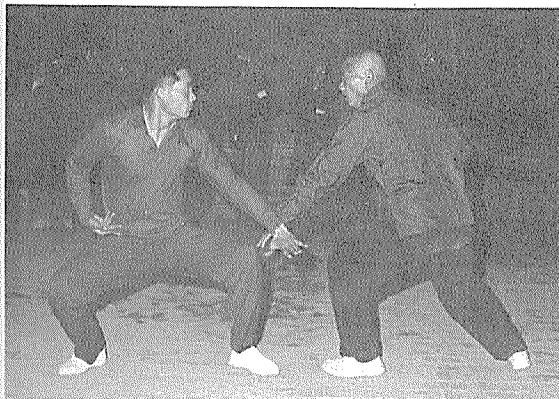
44年ぶりに再会した徳善和尚と宗道臣師家。両師の間に時間も空間も、そして国境のへだたりもなく、あるのはただ人間のおりなす心の豊かさのみ。



廖承志中日友好协会会长より記念の自筆の書を贈られる師家。「少林寺の豪傑である宗道臣先生は、眉をあげて悪に対する戦の先頭に立って指揮をとられる。その先生のある限り中日友好の前途は錦のように輝かしい」という意味である。

少林寺拳法と日中友好のあしあと

- 1973年 5月12日 中日友好協会訪日代表団観迎演武会に少林寺拳法を披露
- 6月24日 第一回実業団大会に、中国大使館より李連慶文化担当参事官はじめ5名の館員が来賓として参加された。
- 8月25日 中国大使館より李連慶参事官、程志邁一等書記官他が少林寺を訪問、3日間管長公館に宿泊され、少林寺との友好を深める。
- ~28日
- 1975年 2月21日 少林寺拳法代表団 中国を訪問
- ~3月12日 宗道臣管長を団長として御家族を含む15名の代表団が、中華全国体育総会の招請を受け、外賓として訪中。北京をはじめ西安、南京、揚州、蘇州、上海を訪問。友好親善を深める。
- 1976年 5月 6日 第二回少林寺拳法代表団訪中、宗道臣団長ほか10名は中華全国体育総会の招きを受け、北京、
- ~23日 ハルビン、大慶、長春、瀋陽、鞍山、撫順等、宗管長第二の故郷ともううべき中国東北の地を訪問。旧交を暖め新しい友を得て帰国。
- 1977年 1月16日 少林寺拳法創立30周年記念、恒例の鏡開き式を挙行。来賓に中国総領事館から田平総領事、劉副総領事、張慶大阪華僑連合会々長ら参列。
- 9月24日 中国武術代表団、王亮団長以下総勢39名並に、中国大使館陳抗参事館、金蘇城一等書記官ら3名、中国総領事館 郭轟領事ら3名、少林寺拳法総本部を表敬訪問。
- 同代表団は9月13日来日、日本各地で公演したが、少林寺拳法は主催又は協力し、日中友好の実をあげた。
- 1978年 9月15日 第三回少林寺拳法代表団訪中。中華全国体育総会からの招きにより、宗道臣管長と御家族を含む10名が訪中。北京から南寧、桂林、昆明、広州等、中国西南の各都市を歴訪。
- ~10月 2日
- 1979年 1月14日 恒例の鏡開き式に符浩中国特命全権大使御夫妻を迎えた。
- 4月11日 中華民国人民代表大会、常務委員会副委員長、中日友好協会会长、廖承志氏の招きにより、御家族ならびに随員3名とともに戦後日本人として初めて嵩山少林寺を訪問。往時の管長を知る德善和尚と再会。地元登封県では、同県体育委員会「少林武術保存整理班」と演武交流をおこなう。又、廖承志会長は北京の人民大会堂に招宴を開き、席上少林寺拳法指導者の中国派遣を要請された。
- 5月 9日 「中日の友好の船訪日代表団」一行六百人が、5月9日の下関港到着を皮切りに、大阪、名古
- ~6月 5日 屋、東京、室蘭など10港に立ち寄り33都道府県を訪ねた。この間少林寺拳士は一日たりとも欠かさずに歓迎集会に加わり、又陰の力として両国友好に寄与した。
- 10月 4日 鈴木義孝本部事務局長を団長とする第五回の訪中団が長崎空港より出発した。

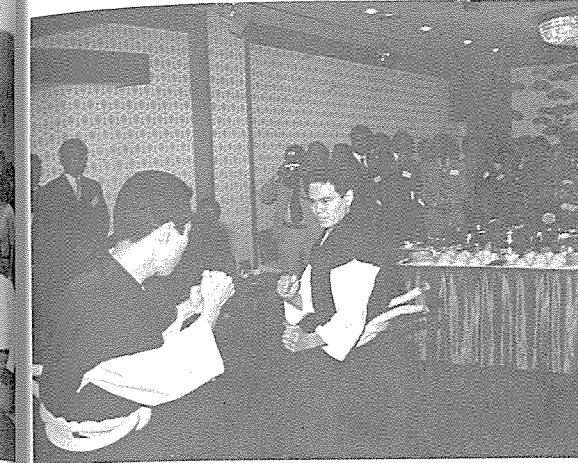
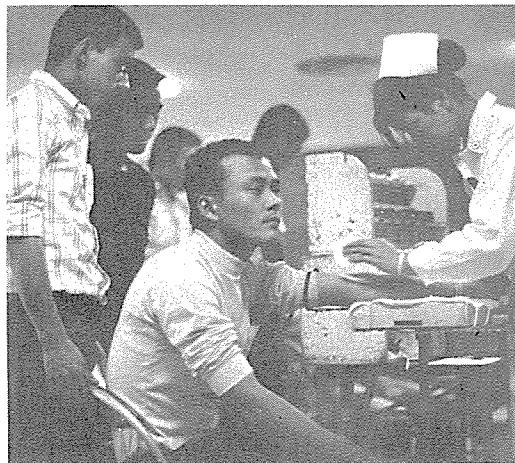


1500年の歴史を静かに伝え続ける中国少林寺の拳。
少林武術保存整理班の演武。



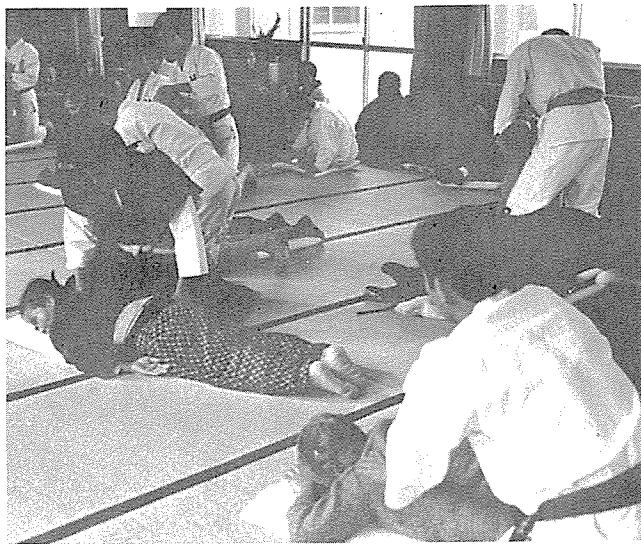
1500年もの歴史を誇る少林寺の拳は、宗師家の手で見事日本で開花した。本家の少林寺山門の前で演武を奉納する山崎准範士と作山大拳士。

国内的には 幸福運動の先陣を切る少林寺拳法



献血運動を行う日本電装支部

日本電装支部は本社、安城、西尾、高棚と各工場に独立した支部があるが、月一回皆が集って合同練習を行う。その度に献血を行い三年前からずっとつづけている。



老人ホームを慰問して整体サービスをする今津自衛隊
饗庭野支部

イラク、ヨルダン、エジプト、クエート等中近東13ヶ国から集った職業訓練行政セミナー（労働省主催、約1ヶ月）の終了親善レセプションで、少林寺拳法を披露する労働省支部。

鉄鋼連盟5社（住友金属工業、神戸製鋼、新日鉄、日本钢管、川崎製鉄）による少林寺拳法鉄鋼連盟結成記念演武大会。横のつながりを更に一層強く。

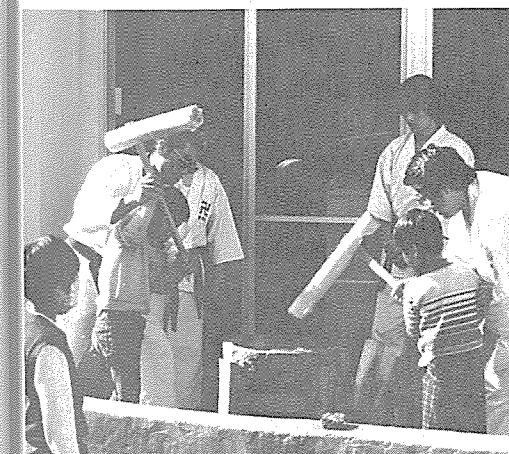
本来、少林寺拳法実業団支部は企業内に於いて、人格の形成と企業の正しい発展の為の推進力の一助に、というのが存在の目的である。

しかし、ひとたび少林寺の哲理を学び、法を知る事のよろこびに目醒めた時、単なる企業内という枠をはるかに超越して、人間としての尊厳と生きがいを求めて、真理の実践の強烈な誘惑にかられる。その実践を我々は幸福運動と呼ぶ。

こと志とたがう出来事に出会うと、そう簡単には引きさがらぬ荒法師たち。その心に宿る小さな愛と実践のよろこび。そしてそれがいかに小さくても、くりかえしくりかえされて、積み重ねられてゆくうちに、荒行で鍛えられた力にも勝るとも劣らぬ愛が育くまれてゆくのである。



毎年歳末になると、助け合い花一杯運動を行う。募金のお返しには花の種。集った募金は善意銀行を通じて、恵まれない人たちへ贈る。住友金属鹿島支部



施設を訪問して、子供達と一緒に過ごす安川電機支部

少林寺拳法実業団全国大会出場選手名簿

初段の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
北海道 関東 東海	航空千歳	福田光司(准拳士・初段)・野崎康寛(准拳士・初段)
	厚木自動車部品	服巻健二(准拳士・初段)・深澤洋(准拳士・初段)
	大同特殊鋼	東学(准拳士・初段)・福島勉(准拳士・初段)
	日本電装	山原美幸(准拳士・初段)・樺沢裕之(准拳士・初段)
関西	大阪府庁	田中武彦(准拳士・初段)・木原茂(准拳士・初段)
	神戸製鋼加古川	佐藤浩司(准拳士・初段)・藤原茂(准拳士・初段)
	松下電器茨木	小野久弥(准拳士・初段)・池本明(准拳士・初段)
中国	倉紡岡山	小田正広(准拳士・初段)・正木裕之(准拳士・初段)
	日本銅管福山	藤岡広樹(准拳士・初段)・内田克己(准拳士・初段)
四国 九州	善通寺自衛隊	国広菊男(准拳士・初段)・仲島耕三(准拳士・初段)
	安川電機本社	白石一喜(准拳士・初段)・佐野良二(准拳士・初段)
		乙藤正弘(准拳士・初段)・高見保彦(准拳士・初段)

二段の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
関東 東海	町田市役所	潮田志呂太(少拳士・二段)・斎藤鎮(少拳士・二段)
	日本電装	矢代隆夫(少拳士・二段)・大江正己(少拳士・二段)
	本田技研鈴鹿	竹下幸二(少拳士・二段)・森下武司(准拳士・初段)
	花王石鹼	吉田昭(少拳士・二段)・岡本正勝(少拳士・二段)
関西	神戸製鋼加古川	西口健司(少拳士・二段)・奥見敏己(少拳士・二段)
	住友金属和歌山	中原晴生(少拳士・二段)・坂口実(准拳士・初段)
	松下電工	野田高季(少拳士・二段)・富永慎吾(准拳士・初段)
	三菱電気京都	松原剛(少拳士・二段)・長江亘(少拳士・二段)
中国 九州	三井造船	長尾栄知(少拳士・二段)・中村文人(少拳士・二段)
	安川電機行橋	井上保美(少拳士・二段)・古川康吉(少拳士・二段)

三段の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
北海道 関東	航空千歳	石村美佐雄(中拳士・三段)・野村直司(中拳士・三段)
	住友金属鹿島	藤好孝東(中拳士・三段)・鈴木源治(中拳士・三段)
	日産横須賀	五十嵐秋男(中拳士・三段)・小松照義(中拳士・三段)
	浜松南支部	山瀬光雄(中拳士・三段)・西岡隆志(中拳士・三段)
静岡 東海	トヨタ拳法部	石橋安孝(中拳士・三段)・久保太平(中拳士・三段)
	日本電装	江田弘己(中拳士・三段)・大澤孝(中拳士・三段)
	大阪府庁	菅井安之(中拳士・三段)・水野康男(少拳士・二段)
	住友金属和歌山	山本和秀(中拳士・三段)・永岡道順(中拳士・三段)
関西	松下豊中	渡辺秀幸(中拳士・三段)・今井那浩(中拳士・三段)
	三井造船	浜田貴男(中拳士・三段)・(三人掛)
	大塚化学今切支部	山根政英(中拳士・三段)・日高敏輝(中拳士・三段)
	電々福岡	上木朝勝(中拳士・三段)・大西閑男(中拳士・三段)
		笛木睦生(中拳士・三段)・下河典昭(中拳士・三段)

少林寺拳法実業団全国大会出場選手名簿

四段の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
関東海関 中四国九州	電々中央	前田栄治(正拳士・四段)・入村良明(正拳士・四段)
	日本電装	吉岡修(大拳士・五段)・植田和己(中拳士・三段)
	関西帆布	豊嶋盛行(大拳士・五段)・原口弘(中拳士・三段)
	神戸製鋼加古川	藤原一成(正拳士・四段)・武城正之(中拳士・三段)
	松下電器茨木	大西将晴(正拳士・四段)・疋田利春(正拳士・四段)
	松下コンデンサー	中尾千里(少拳士・二段)・中野幸一(正拳士・四段)
	三井造船	辻崎竹彦(正拳士・四段)・片岡達夫(中拳士・三段)
	徳教群	谷口初夫(中拳士・三段)・山本正章(大拳士・五段)
	安川電機行橋	寺川孝志(正拳士・四段)・檍本和文(中拳士・三段)
	広津智一	広津智一(正拳士・四段)・前畠健治(正拳士・四段)

女子の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
関東海 九州	服部	成田みな子(准拳士・初段)・増井満里子(准拳士・初段)
	トヨタ拳法部	榎谷ますみ(一級)・丸野啓子(准拳士・初段)
	日本電装	福林千賀(准拳士・初段)・椎山孝子(准拳士・初段)
	安川電機行橋	皆川珠美(三級)・竹中直美(三級)

混合の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
関東 東海 関西	気象庁	伊藤礼子(准拳士・初段)・田中慎一(准拳士・初段)
	日本電装	繁田知香子(准拳士・初段)・(三人掛)
		北恵武行(少拳士・二段)・岩永祐子(准拳士・初段)
		金岡輝樹(准拳士・初段)・権頭容子(一級)
		宮岡新一(見習)・山崎すま子(見習)
		肥留間啓文(正拳士・四段)・藤井篤子(准拳士・初段)
		光安忠明(准拳士・初段)・桜井裕美(准拳士・初段)
		村上正信(准拳士・初段)・井上みゆき(准拳士・初段)
		森迫剛(三級)・梅田昌美(三級)

年少の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
関東西 中四国九州	浦和市役所	中村彰(二級)・根岸利樹(四級)
	関西帆布	大出欣也(四級)・和田富悦(五級)
		田中克彦(五級)・田中民夫(五級)
		山根良太(二級)・三原英樹(二級)
		吉本訓(二級)・(三人掛)
		小島勉(四級)・茂木俊弥(四級)
		神谷憲一(准拳士・初段)・汀裕樹雄(准拳士・初段)
		松本道之(三級)・篠原卓也(二級)
		春木徹(四級)・沢田信一(四級)
	関西山崎吹田 神戸製鋼加古川 東京芝浦電機姫路 松下電器茨木 松下コンデンサー	松沢計夫(准拳士・初段)・奥田実(准拳士・初段)
	ナイカイ 大塚化学今切 安川電機行橋	秋中勇一(准拳士・初段)・高畠秀明(准拳士・四段)
	ナインカイ 大塚化学今切 安川電機行橋	森順一(四級)・定金孝典(四級)
	ナインカイ 大塚化学今切 安川電機行橋	田中通真(三級)・吉川浩司(四級)

少林寺拳法実業団全国大会出場選手名簿

団体の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
関 東	日産横須賀	大澤俊美(准拳士・初段)・藏谷孝行(准拳士・初段) 久保田 孝(少拳士・二段)・田村十吾(准拳士・初段) 藤 平 勇(准拳士・初段)・福原正之(准拳士・初段) 山口泰樹(少拳士・二段)・中津留和弘(一級) 鈴木啓之(中拳士・三段)・佐藤勝彦(少拳士・二段)
静 岡	浜松南支部	村松正運(中拳士・三段)・鈴木登美雄(少拳士・二段) 金子智彦(中拳士・三段)・山下光男(少拳士・二段) 横井俊二(中拳士・三段)・西田孝之(少拳士・二段)
東 海	アイシンワーナー支部	木村峰穂(大拳士・五段)・安井博昭(中拳士・三段) 白石隆栄(少拳士・二段)・松田浩一(中拳士・三段) 田中幸一(少拳士・二段)・川内喜男(少拳士・二段) 木下新吾(一級)
	日本電装	木島司(准拳士・初段)・宮本貴久(准拳士・初段) 相沢正人(准拳士・初段)・花尻好司(准拳士・初段) 上島英敏(一級)・舛田一郎(一級)
関 西	今津自衛隊 饗庭野支部	柳田重之(大拳士・五段)・大谷昭次郎(中拳士・三段) 長濱健治(少拳士・二段)・安田茂(少拳士・二段) 山内至(准拳士・初段)・仲宗根朝武(准拳士・初段) 迫田信哉(一級)
	大阪府庁	久保一敏(少拳士・二段)・大橋敏弘(准拳士・初段) 田中勝(准拳士・初段)・佐藤浩司(准拳士・初段) 藤原茂(准拳士・初段)・上田清治(准拳士・初段) 三宅徳衛(准拳士・初段)
	花王石鹼支部	井上賢二(中拳士・三段)・佐野正康(少拳士・二段) 遠藤明(少拳士・二段)・藤井良朗(少拳士・二段) 吉田昭(少拳士・二段)・岡本正勝(少拳士・二段) 北一男(准拳士・初段)・下敷公夫(准拳士・初段)
	加古川市役所	篠原強(少拳士・二段)・西田正幸(少拳士・二段) 中井正夫(准拳士・初段)・山内俊明(准拳士・初段) 船原将司(准拳士・初段)・坂田吉正(准拳士・初段)
	住友金属和歌山	山本和秀(中拳士・三段)・国森教範(中拳士・三段) 重田伸雄(正拳士・四段)・安倍啓司(少拳士・二段) 下田行輝(准拳士・初段)・春野勝義(准拳士・初段) 田中康仁(准拳士・初段)・半沢孝一(准拳士・初段)
	象印チェーンブロック	阪本忠博(二級)・岡邦彦(二級) 早田昭吉(二級)・崎下優(二級) 柳田昭義(二級)・三浦信行(二級) 桜井昭典(二級)・信田憲治(二級) 金野壯(二級)

少林寺拳法実業団全国大会出場選手名簿

団体の部

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
関 西	奈 良 基 地	中濱 弘之(中拳士・三段)・松尾 茂(中拳士・三段) 中山伊都夫(二級)・濱田 孝(二級) 藤森 幸則(二級)・平山 照明(二級) 森脇 康允(二級)・登 龍 稔(見習) 片岡 仁(少拳士・二段)・片岡 達夫(中拳士・三段) 舟櫛 修一(中拳士・三段)・壇 和 章(中拳士・三段) 竹内 克(中拳士・三段)・林 英 一(少拳士・二段) 水野由希夫(少拳士・二段)・坂本 敏 明(少拳士・二段) 谷口 雅 幸(少拳士・二段)
	松下コンデンサー	
	松 下 電 器 茨 木	大西 将 晴(正拳士・四段)・疋田 利 春(正拳士・四段) 中野 幸 一(正拳士・四段)・中尾 千 里(少拳士・二段) 水本 岩 治(少拳士・二段)・小田 正 広(准拳士・初段) 正木 裕 之(准拳士・初段)・西川 和 宏(准拳士・初段) 渡辺 秀 幸(中拳士・三段)・今井 那 浩(中拳士・三段) 浜田 貴 男(中拳士・三段)・村端 彰 彦(准拳士・初段) 西田 信 夫(准拳士・初段)・石地 稔 照(准拳士・初段) 磯水 豊(中拳士・三段)・田中 亨 佳(中拳士・三段)
	松 下 豊 中	
	丸 増	中川 正 次(中拳士・三段)・佐々木 茂(中拳士・三段) 古賀 修 平(少拳士・二段)・中川 雄 治(少拳士・二段) 渡辺 義 雄(少拳士・二段)・清水 昭(准拳士・初段) 寺川 孝 忠(正拳士・四段)・和田 順 一(少拳士・二段) 樺本 和 文(中拳士・三段)・戸城 種 一(少拳士・二段) 伏見 光 弘(中拳士・三段)・金子 直 実(准拳士・初段) 永手 博 人(中拳士・三段)・武田 照 男(准拳士・初段)
四 国	徳 教 群	

年少部団体(関西実業団最優秀演武)

地区名	支部名	拳士名(法階・武階)
関 西	関 西 帆 布	新枝 幸太郎(二級)・田村 健二郎(五級) 中吉 哲也(五級)・木下 博 康(五級) 原田 隆(五級)・村西 拓 治(六級) 根来 嘉 洋(六級)・広瀬 貴 規(見習) 大坪 功 佳(見習)・吉川 信 一 郎(見習)

少林寺拳法実業団支部

(五十音順)

支 部 名	支 部 長	支 部 長 住 所
一 北 海 道 地 区		
オーホツクケンペ	酒田 正明	〒096 北海道名寄市東2条南2丁目
上富良野自衛隊	天野 強	〒071-05 北海道空知郡上富良野町東ノ線北24号 自衛隊
北千歳自衛隊	甲斐 哲夫	〒066 北海道千歳市住吉4丁目3-27
航空千歳	大寺 勉	〒066 北海道千歳市真町389ノ111官舎124
札幌市役所	守屋 守人	〒063 札幌市西区手稲宮の沢324-51
東千歳自衛隊	米山 寛	〒066 北海道千歳市北栄1丁目14-13
ほくさん商事	白鳥 一記	〒060 札幌市中央区北3条西1丁目2番地 ほくさん商事内
美幌自衛隊	河野 直	〒092 北海道網走郡三幌町稻美59 官舎29ノA
一 東 北 地 区		
青森県庁	相馬十九三	〒036 青森県弘前市大字境関字富岳50-4
八戸基地	工藤 昭	〒031 青森県八戸市大字河原木字八太郎山官地 海上自衛隊42分隊
一 関 東 地 区		
厚木自動車	河本 雅明	〒229 神奈川県相模原市淵野辺本町2-16-11
厚木市役所	小林 晃	〒243 神奈川県厚木市戸室616
浦和市役所	小宮山宣司	〒336 埼玉県浦和市大字大牧1342-4
小田急	磯谷 孝夫	〒350-02 埼玉県入間郡鶴ヶ島町大字藤金890-53
鎌倉市役所	大木 信一	〒246 横浜市瀬谷区瀬谷町3731 高橋マンション2-2
木更津農協	斎藤 善一	〒292-03 千葉県君津市米吉1282
気象庁	安在 孝夫	〒277 千葉県柏市旭町8-1-32-202
キヤノン	大迫 俊治	〒241 横浜市旭区上白根町字大池上891 西ひかりが丘団地17-1-503
京王百貨店	澤田 俊彦	〒133 東京都江戸川区南小岩6-5-20 光月荘
国会拳法部	伊井 宗男	〒100 東京都千代田区永田町2-17-18 衆議院職員寮401号
下總基地	萩原 俊次	〒277 千葉県東葛飾郡沼南町藤ヶ谷1113
首都公団	工藤 明	〒349-11 埼玉県北葛飾郡栗橋町大字栗橋2441-11
新宿	高松 恒夫	〒146 東京都太田区仲池上1-3-7
住友金属鹿島	谷田川 正	〒311-22 茨城県鹿島郡大野村大字林798
住友重機横須賀	岩堀 紀久	〒239 神奈川県横須賀市浦賀町1-45
ソニーワン	前川 義哉	〒171 東京都豊島区千早町3-4
千葉市役所	小川 直哉	〒280 千葉市千城台南2-4-9-208
東京応化工業	田村 義久	〒253-01 神奈川県高座郡寒川町一之宮2285
東京急行	小池 秋穂	〒233 横浜市港南区野庭町482
東京港区役所	石井 宏明	〒107 東京都港区赤坂3-13-12 赤坂公益質屋内
東京重機	栗山 安生	〒182 東京都狛江市東野川4-1-16
東洋エンジニアリング	但野 正史	〒273 千葉県船橋市夏見台1-20-3-104
電々中央	佐野 潔	〒359 埼玉県所沢市大字神米金180-2
電々横通	安田 恒雄	〒236 横浜市金沢区釜利谷町946 第二青木荘1-1

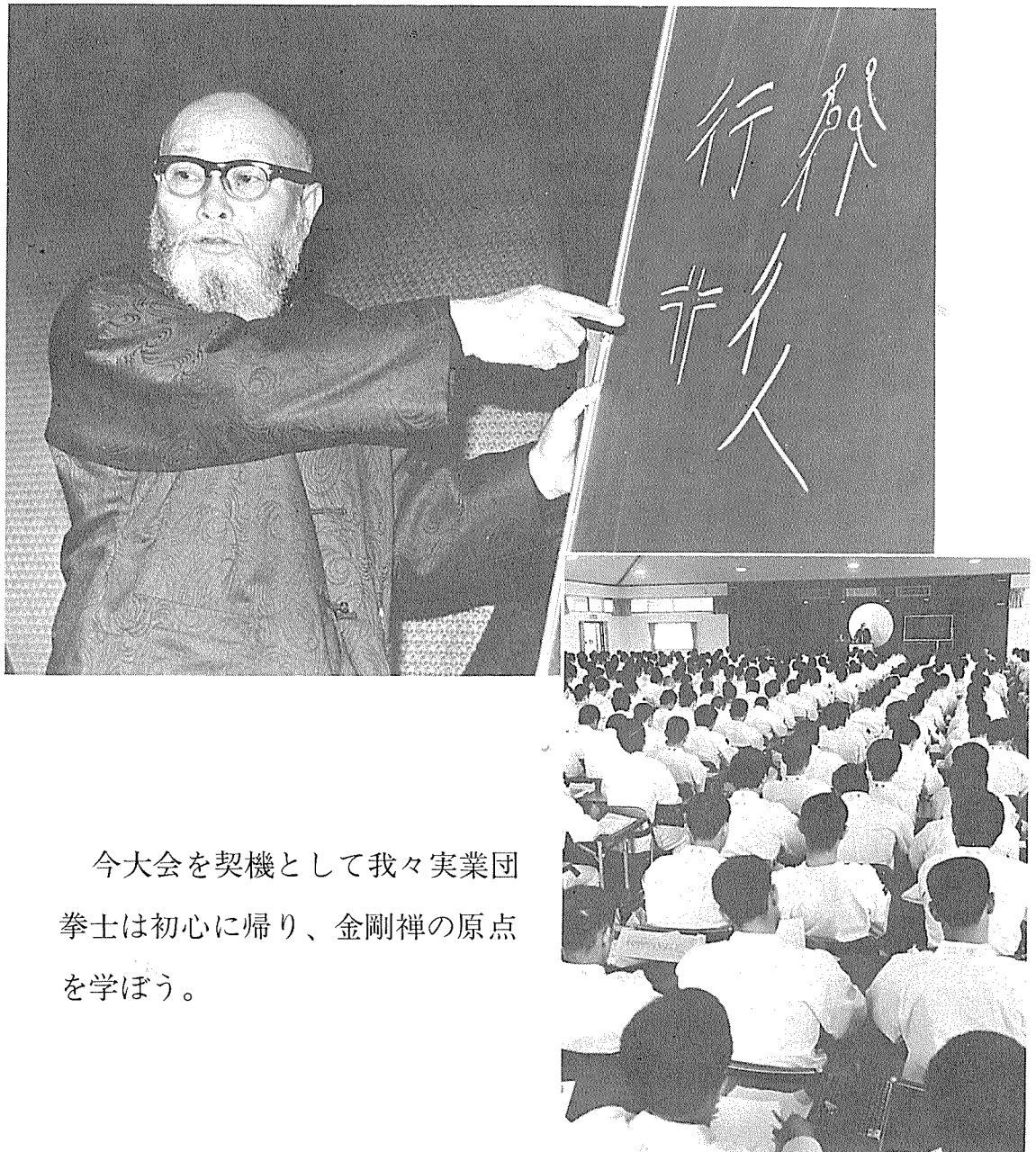
支 部 名	支 部 長	支 部 長 住 所
日 産 横 須 賀	加 藤 一 利	〒221 横浜市神奈川区西神奈川町5-131
農 林 省	武 田 隆 夫	〒980 宮城県仙台市中山5丁目18番 中山住宅3-503
服 部	松 沼 稔	〒170 東京都豊島区南大塚2-44-5 大塚シティホテル
東 村 山 市 役 所	小 林 二 三 男	〒190-12 東京都武蔵村山市榎2丁目2番地2
日 立 柏	高 木 俊 知	〒281 千葉県千葉市花園4丁目14-7
百 里 航 空 隊	古 田 久 雄	〒311-34 茨城県東茨城郡小川町大字百里170-301 S Q
富 士 ゼ ロ ッ ク ス	鈴 木 文 彦	〒243 神奈川県海老名市中新田337
防 衛 庁	小 泉 行 功	〒107 東京都港区赤坂9-7-45 防衛庁空幕
町 田 市 役 所	斎 藤 鎮	〒194-01 東京都町田市金井町2612-173
松 戸 市 役 所	渡 来 士 郎	〒271 千葉県松戸市稔台137-2
レ ナ ウ ノ	中 里 一 雄	〒154 東京都世田谷区駒沢2-14-1 フォンタナ駒沢台2204
労 働 省	松 木 長 實	〒158 東京都世田谷区上用賀4-36 E 501
- 静岡 地 区 -		
小 糸 製 作 所	吉 岡 秀 規	〒421-21 静岡県静岡市油山1695
鈴 木 自 動 車	鈴 木 啓 之	〒439 静岡県小笠郡菊川町東横地1884-3
浜 松 南 自 衛 隊	菅 尚 武	〒438-01 静岡県磐田郡豊岡村神増316
- 東 海 地 区 -		
ア イ シ ナ ワ ナ ナ	高 松 政 友	〒448 愛知県刈谷市高須町森跡2番地
一 宮 警 察 署	尾 関 夷 三 郎	〒483 愛知県江南市大字鹿子島722-1
小 牧 航 空 隊	寺 元 敏 明	〒487 愛知県春日井市白山町1855-1 藤山台団地104棟407号
清 水 建 設	高 橋 延 明	〒463 名古屋市守山区小幡字小林2984-96 清水建設第三アパート2025
大 同 特 殊 鋼	梅 野 広 明	〒457 名古屋市南区天白町3の9の116 北社宅21号
ト ヨ タ 拳 法 部	山 下 咲 雄	〒471 愛知県豊田市双美町2-65
ト ヨ タ 堤	西 浦 莜	〒444-21 愛知県岡崎市岩津町字新城82-15
日 本 電 装	進 藤 勝 則	〒448 愛知県刈谷市池田町1-34-7
日 本 電 装 安 城	水 野 広 春	〒470-21 愛知県知多郡東浦町大字緒川屋敷一区96
名 鉄 N S G	佐 々 木 陽 明	〒492 愛知県稻沢市稻島町1801
本 田 技 研 鈴 鹿	佐 藤 恒 男	〒498 愛知県海部郡弥富町前ヶ須485-1
丸 太 運 輸	森 川 辰 幸	〒457 名古屋市南区道德通り2-57
- 北 陸 地 区 -		
第 六 航 空 団	西 正 隆 則	〒923 石川県小松市向本折町 航空自衛隊
- 關 西 地 区 -		
饗 庭 野 支 部 (今 津 自 衛 隊)	柳 田 重 之	〒520-16 滋賀県高島郡今津町大字弘川14-13
青 野 原 自 衛 隊	堀 田 敏 郎	〒675-13 兵庫県小野市桜台10-24号棟201
朝 日 放 送	河 本 馨	〒618 京都府乙訓郡大山崎町字円明寺小字殿山1番地111 E-106
大 阪 造 船	河 原 清 三	〒552 大阪市港区三先2-4-27 みさき寮
大 阪 地 裁	森 川 正 美	〒570 大阪府守口市寺方元町4-5
大阪府信用保証協会	新 居 健 彦	〒578 東大阪市南鴻池町2丁目4-29

支 部 名	支 部 長	支 部 長 住 所
大 阪 府 庁	中 西 典 昭	〒558 大阪市住吉区長居町東4-126 長居東コーポ714号
海 南 市 役 所	浦 和 広	〒642 和歌山県海南市重根1190 新原荘内7号
花 王 石 磚	松 田 守 生	〒640-11 和歌山県海草郡野上町小畠834-59
加 古 川 市 役 所	山 田 信 幸	〒676 兵庫県加古川市加古川町河原390-06
関 西 帆 布	竹 之 内 慶 二	〒658 神戸市東灘区魚崎北町5丁目2-25
関 西 山 崎 吹 田	辻 本 政 治	〒577 東大阪市新上小阪15-22
関 西 山 崎 松 原	宗 圓 光 市	〒546 大阪市東住吉区湯里町3丁目268-5
京 都 新 聞	奥 村 真 邦	〒617 京都府長岡京市友岡4丁目8-7
神 戸 港 保 安	森 道 基	〒657 神戸市灘区篠原中町1丁目5番6号
神 戸 製 鋼 加 古 川	松 本 一 男	〒676 加古川市尾上町口里790-8 神鋼社宅D-301号
神 戸 製 鋼 神 戸	高 畑 克 昭	〒658 神戸市東灘区本山南町3丁目2番1-114
近 畿 麻 取	高 浜 良 次	〒591 大阪府堺市日置莊原寺405
住 友 金 属 和 歌 山	小 笠 原 国 勝	〒640-03 和歌山市吉礼434-2 35棟295号
住 友 化 学 大 阪	国 竹 富 雄	〒573 大阪府枚方市村野東町69-2
象 印 チ ェ ー ン プ ロ ッ ク	山 本 泰 治	〒589 大阪府南河内郡狭山町大字岩室180
高 砂 市 役 所	寺 村 正 美	〒676 兵庫県高砂市高砂町松波1-28-4
但 馬 松 下	木 下 弘 明	〒668-02 兵庫県出石郡出石町材木48
東 芝 姫 路	花 畑 猛	〒671-15 兵庫県揖保郡太子町鶴596-2
豊 中 市 役 所	小 城 克 未	〒563-02 大阪府豊能郡豊能町切畑512
奈 良 基 地	大 島 孝 雄	〒634 奈良県橿原市八木町1丁目6-360
西 宮 市 役 所	加 藤 忠	〒663 兵庫県西宮市樋ノ口町1丁目167-7
日 本 電 池	高 橋 幸 夫	〒601 京都市南区吉祥院西浦町12
寝 屋 川 市 役 所	高 橋 章	〒572 大阪府寝屋川市昭栄町16-11
阪 神 百 貨 店	木 村 恵 昭	〒534 大阪市都島区御幸町1-4-27
姫 路 自 衛 隊	細 川 桂 次	〒670 兵庫県姫路市広峰1丁目12-1-501
兵 庫 県 庁	浜 田 憲 正	〒650 神戸市生田区加納町2丁目1-46
富 士 通 明 石	増 田 勉	〒675-13 兵庫県小野市垂井町417-4 4棟502号
松 下 電 器 苺 木	高 倉 正 明	〒567 大阪府茨木市水尾3丁目11-406号
松 下 コ ン デ ン サ ー	福 田 つ よ し	〒601-13 京都市伏見区南里町20-14
松 下 電 器 本 社	長 田 敏 夫	〒572 大阪府寝屋川市明徳2丁目12番 C20-306号
松 下 電 工	福 田 丈 俊	〒573 大阪府枚方市船橋本町2丁目49-2
松 下 電 器 豊 中	羽 野 洋 一	〒666-01 兵庫県川西市清和台東2丁目1-8 (松下社宅107号)
松 下 電 器 ラ ジ オ	細 川 幸 一	〒572 寝屋川市御幸東町3-14松風寮
丸 増	峠 徹	〒615 京都市右京区川島滑樋町40-9
三 菱 伊 丹	大 西 宏 之	〒666-01 兵庫県川西市多田院滝原2-3
三 菱 京 都	小 串 信 之	〒611 宇治市大久保町旦椋76-1 府営住宅7棟407号
読 売 テ レ ビ 放 送	山 田 直 也	〒560 豊中市服部西町3-3-21
- 中 国 地 区 -		
岩 国 基 地	多々 良 秀 澄	〒740 山口県岩国市三角町2 海上自衛隊第31支整

支 部 名	支 部 長	支 部 長 住 所
川 鉄 水 島	小 西 幸 一	〒712 岡山県倉敷市鶴ノ浦1ノ5 E 4-313
倉 敷 中 央 病 院	山 部 俊 一 郎	〒710 岡山県倉敷市粒浦697
倉 紡 岡 山	大 門 正 利	〒700 岡山県岡山市北方4丁目4-15
吳 自 衛 隊	守 安 殿 明	〒737 広島県吳市焼山町大道田1441-67
住 友 重 機 玉 島	板 谷 時 男	〒710 岡山県倉敷市西富井639-10
ナ イ カ イ	妹 尾 康 之	〒706-03 岡山県玉野市梶岡729-3
日 本 鋼 管 福 山	土 屋 孝 史	〒721 広島県福山市引野町669-15 H704
備 前 松 下	入 矢 勝 正	〒709-08 岡山県赤磐郡瀬戸町宗堂491
防 府 北 自 衛 隊	喜 島 忠 志	〒747 山口県防府市大字牟礼3042-3
三 井 造 船	義 若 道 恵	〒706 岡山県玉野市長尾池尻1588-21
-四 国 地 区-		
大 塚 化 学 今 切	藤 山 秀 夫	〒770 徳島市名東町2丁目345-6
川 重 坂 出	横 田 光 正	〒765 香川県善通寺市金蔵寺町739
高 知 電 ワ	太 田 勝 義	〒781-02 高知市長浜5681
住 友 化 学 菊 本	磯 忠 則	〒792 愛媛県新居浜市菊本町1-7-12
善 通 寺 自 衛 隊	森 博 海	〒765 香川県善通寺市生野町字條2335-5
電 ワ 德 島	渡 边 邦 弘	〒770 徳島市八万町千鳥83-5
德・教・群自衛隊	三 浦 清 二	〒770 徳島市八万町中津山2-49
動 労 德 島	坂 東 邦 伯	〒770 徳島市中前川町1丁目46 鉄道公舎
Y K K 四 国	乾 万 訓	〒769-02 香川県綾歌郡宇多津町231 県営2004
-九 州 地 区-		
行 橋 中 部	田 中 克 樹	〒824 福岡県行橋市上宮市セキノ下143-12 三共苑団地30号
北 九 州 黒 崎	藤 田 晋 治	〒806 北九州市八幡西区岡田町12番12-104
北 熊 本 自 衛 隊	緒 方 則 夫	〒861-55 熊本県飽託郡北部町鶴羽田1277-43
航 空 新 田 原	日 高 康 朝	〒889-14 宮崎県児湯郡新富町 航空第5航空団装備隊
新 日 鉄 八 幡	深 見 征	〒803 北九州市小倉北区中井4-7-1-404
親 和 銀 行	町 田 元 一	〒854-03 長崎県南高来郡愛野町乙5872-4
電 ワ 小 倉	田 崎 高 松	〒800-02 北九州市小倉北区上富野3-19 電通アパート4-202
電 ワ 福 岡	佐 藤 順 一	〒819-11 福岡県糸島郡前原町池田639-6
電 ワ 福 岡 東	西 村 久 夫	〒813 福岡県福岡市東区城浜団地37棟-504号
西 鉄 小 倉	山 本 薫	〒802 北九州市小倉南区富士見3-1-1-303
福 岡 部 隊	阿 部 康 広	〒816 福岡県春日市大和町5-12 陸上自衛隊
本 田 技 研 熊 本	長 尾 隆	〒869-12 熊本県菊池郡大津町大字大津1526-1
都 城 自 衛 隊	中 村 久 雄	〒885 宮崎県都城市菖蒲原町18街区-4号
-沖 繩 地 区-		
那 頭 航 空 隊	鈴 木 孝 一	〒901-01 沖縄県那霸市鏡水679 航空自衛隊83航空隊 修理隊

学習のページ

金剛禅の原点



今大会を契機として我々実業団
拳士は初心に帰り、金剛禅の原点
を学ぼう。

はじめに

飛躍をつづける少林寺。

去る8月のお盆の3日間(12日～14日)実業団支部長を筆頭に、各道院支部の幹部を対象とした1979年度第一次指導者特別講習会が開催された。

「少林寺は激動のさ中にある」管長法話第一日目の第一声である。

本年2月には衆参両院議員の有志による少林寺拳法議員連盟が誕生し、各党派にわたり90余名が結集された。

幼少年拳士の激増も依然として続いている。現代教育の歪みを正し、補完してもらうことを期待した世間の親達の願いのあらわれであろう。

少林寺として日中友好関係は更に前進している。正月の鏡開式への符浩中国特命全権大使の来山をはじめ、4月には廖承志中華全国人民代表大会常務委員会副委員長、中日友好協会会长の招請により、44年ぶりに祖山である嵩山少林寺への帰山をはたし、中国との友好は更に前進した。中国政府発行の「人民中国」6月号には曾慶南記者の署名記事としてこのことが大きくとりあげられ、日本の宗教界、武道界に大きな反響を巻き起している。又、廖承志会長から、重ねて指導者派遣の要請を受けたことは、(師家は日本国内での指導者の充実がまだ急務な時だけに、辞退されはしたもの) 転換期に立つ中国の指導者層が、青少年教育を立て直す一つの柱として、少林寺に着目しているのはまぎれもない事実である。

又、本年中日友好の船は1ヶ月を要して日本列島を一周したが、少林寺関係者は蔭の力として大きな力を發揮し、全団員から船員に至る迄、少林寺拳士と見れば必ず合掌礼でいさつされるのが当たり前となった。少林寺の民間外交の成果は大である。

うぬぼれない自信をもって。

このように内外とも発展をつづけ、社会的にも注目をあびるようになった少林寺が、この急激な膨張発展の速度に対応、対処してゆく為に、今最も必要な事は少林寺拳法を行ずる者の一人一人の質の向上である。大きく飛躍する為には一度足場を固め屈身する事が必要であるように、今こそすべての少林寺拳法を行ずるものが、ひとしく脚下を照顧し、拳士としての自らの姿勢をきびしく見直すべき時なのである。

我々にとって姿勢を正すための基本は常に原点に帰るしかない、そして原点に帰るという事は、少林寺の開創の動機と目的を理解し、宗道臣師家の歩まれた道と共に歩むという事である。本大会を契機として、実業団少林寺拳法連盟の旗の下に集う我々は、教範第一章を手がかりとして、33年前に思いをはせ、師家の説かれる原点の所在をあらためて学びなおすよがしたい。

金剛禅の原点

その I

激動の昭和史から

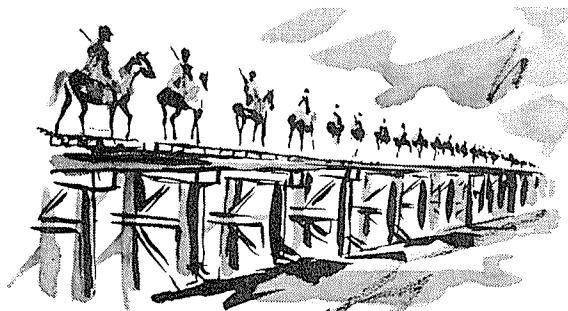
(1) 激動の昭和史から

奈落の底へ落ちる日本

第一次大戦直後の戦後不況から始り、関東大震災による震災恐慌を経て、世界大恐慌に巻き込まれてゆく長い不況を底流として、

内には、財閥の独占進行、政党政治の腐敗堕落と密接にからみあいながら、三月事件、十月事件、血盟団事件、五・一五事件、二・二六事件等、続発するテロリズムを通じて次第に活発になる軍閥の動き。

外には、当時満州某重大事件として闇に葬り去られた張作霖爆殺に端を発し、満州事変、支那事変、太平洋戦争へと、軍と財閥が抱合された形で、果てしなく拡がる戦争への道（「金剛禅の原点について」9ページ、昭和史の学習の為に）



満州事変勃発。（昭和6年9月18日）
嫩江を行く日本軍の騎兵隊。

冒頭の文章は1975年度少林寺拳法夏期大学のテキストに使用された「金剛禅の原点について」から引用したものである。昭和初期の日本の姿を一読して瞭然とわかる解説である。

少林寺拳法と昭和史……

歴史から我々は何を学ぶか

さて少林寺拳法を行じ、金剛禅の思想を実践して、平和で豊かな社会建設に益するにたる有能な人材

になろう、と修行に励む拳士にとって、この時代の学習は必須条件である。何故ならそれには次の二つの理由があるからである。

(A) 激動の時代 この時代はまさに激動の時代である。瞬間に起り、消され、移り、変る事件のひとこまひとこまに「すべてのものが人によって行なわれるならば、国の政治も経済も外交も、すべてのものがそこに立つ人の質によって決まる」という、金剛禪の思想の原点、が宿っている。そもそも国家は国民の幸福を追求して存在すべきものである。国民の幸福を踏みにじり、国民の犠牲の上に国家の発展があったとしても、それは国家の意味をなさない。ところが当時の日本は、天皇を頂点とした「たての系列」の、軍部支配による絶対軍国主義国家であった。軍隊を統帥する天皇の御名を利用しながら、国民のすべての自由を束縛して、八紘一宇、大東亜建設の名のもとにひたすら侵略へひた走る軍部。その軍部と密着して儲けをたくらむ財閥。政治家は“民意の反映”が彼らに課せられた絶対条件であるのにもかかわらず、軍部独裁によって完全に去勢されて、徒らに党利党略にあけくれるのみであった。このように重くたれこめる灰色の雲の下で、日、一日と戦争へ傾斜した道を転がり落ちてゆく日本の姿。どのような人々が、誰の為に、何の為に、どう生きたか、一億国民総玉碎寸前迄導いた責任者。純粋に報國に殉じた幾百万もの若者、無念の涙、怨念の情を胸に、玉碎した人々、望郷の夢に胸をかきむしりながら人知れず異国の凍土に埋葬もれていった人々。あるいは、またすべてのものを超越して存在する人間の尊厳に命を賭けた人々。当時の歴史の舞台の表裏を生きたあらゆる人々は、三十四年の歳月の流れの中で半数以上が歴史の彼方で永遠の眠りについている。ただ、今なおつづく遺族のはかり知れない悲しみと悔恨と、そして、億万の巨財にもかえがたい高価な未来への教訓を残して……。

しかし、今現実に生きている我々には、この悲しい歴史を礎にして、「今日」を正しく生きて「明日」の発展に寄与しなければならない。



人間の尊厳は、同じ日本人の手でおしつぶされた。



二・二六事件（昭和11年2月26日）

けっ起部隊が掲げた尊皇討奸旗“天皇をいただき邪悪な家来を討つ”的意味。けっ起部隊はやがて反乱軍と呼称が変わり、討伐される。のちに銃殺刑。

しかし裏には、これに乗ろうとした老かいな將軍もいた。

この歴史を経験しない国民が早くも半数を越えた。

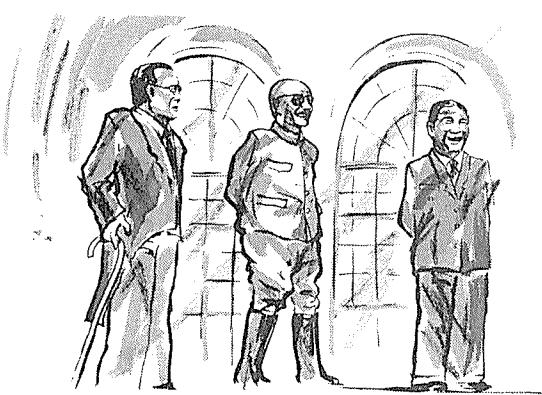
それだけにこの激動の昭和史を単なる過去の歴史として忘却の果てに流してしまうわけにはゆかない。

激動の昭和初期の政治、外交、経済、社会、文化等のからみあう昭和史の瞬間をひとつひとつ学び、そこから、「いかなる人が、求められるべき人であるか」を見つけ出し、人格形成、人間完成のひとつの目標にして、今日の修行にはげみ、明日の為に生かす必要がここに存在するのである。金剛禪の原点を形成する三つの礎石の中で、この激動の昭和史の学習は少林寺の拳士の絶対に避けて通れぬ関門である

事を知るべきである。

(B) 現代は昭和初期の様相と酷似 現代の世相が昭和初期の歴史にあまりにも酷似しているという点である。

宗道臣師家が、現代は昭和初期の予兆である、と警鐘を鳴らされて久しい。政治は党利党略、派利派略の政争の具となっている。ロッキード、グラマンの疑惑事件を見る政財界の癪着。何ものも信頼しなくなった国民の政治への無関心。いつ果てるともなく続く慢性化した不況。情報の洪水に流されて主体性を失った若者のつかの間の享樂に身を没している姿。国民の知らないところで着々と進められている軍事研究。あまりにも昭和初期のそれと酷似しているではないか。権力に屈した国民がなすすべもなく時流に流された結果、その高価なツケがやがて自分達にふりかかった、あのいまわしい、そして、ごく身近な歴史を忘れてしまうわけにはいかない。常に不安が内在する虚妄の繁栄は、実業団拳士ならば痛い程知っているはずである。その虚妄の繁栄に酔いしれ、社会建設への無関心、他人まかせは、やがて頂点から末端への「たての系列」の悲劇に見舞われる事になる恐れが充分ある。弱い者が損をする。正直者が馬鹿を見る。正義がすたれ道義が見失なわれる。こんな退廃的な日本に二度としない為にも、我々は歴史から、「あるまじき人」の姿を知り、「あるべき人」の姿を学んで、「たての系列」から降りかかる幣害は、「よこのつながり」の強い力ではねのけて、宗道臣師家の少林寺建立の目的である



「何がそんなにおかしい」

昭和16年10月18日東条英機内閣成立。
敗戦後はA級戦犯として絞首刑。

「再び平和な日本を建設」するための社会のリーダーにならなければならない。

歴史から我々は何を学ぶべきか。日本が未来に向って前進してゆく過程で、絶対にゆずってはならない一線を、この激動の昭和史の中から学びとらねばならないのである。



遠く離れた故国の肉親に思いをはせ、就寝ラッパは今日も哀しく異国の丘を流れてゆく。

(2) 敗戦と敵国に於ける極限状況下での生活から

* * (少林寺拳法教範)* * * * *

昭和20年8月7日午前4時、ソビエート・ロシアは日ソ不可侵条約を一方的に破棄して、突如飛行機による満州国内の軍事施設に猛爆撃を開始し、夜明と共に機械化されたソ連軍の大部隊は各方面から一斉に国境を突破して、満州領内へ侵入を開始した。当時私が住んでいた東部満州の国境の町綏陽には県公署があり、日本軍の某師団（特に名を秘す）が駐屯していたのであるが、ソ連軍の参戦が知らされた頃には、警察の兵事係に命じ日本人の民間男子人を非常召集させ、これに木銃を持たせて軍事施設や橋などの警備を命じておいて、師団は司令部はじめ各部隊共、朝のうちにソ連軍とは一戦も交えることなく、後方の第二線陣地で抗戦するのだと称して何もかも捨てて退却してしまった。そして街に残されたのは、一般から臨時召集された少数の男子と逃げおくれた地方人の女や子供達ばかりで、正午前には憲兵隊はじめ正規の軍人はその家族と共に一人も残らず消えていたのである。

この日本軍に見捨てられた国境の町に、ソ連軍の先頭部隊が入るのを見届けてからやつと脱出した私は、それからの約一年間をソビエート共産軍の軍政下にあった満州に於て生活し、敵地における敗戦国民の惨さと悲哀を十二分に体験した。イデオロギーや宗教や道徳よりも、国家や民族の利害の方が優先し、力だけが正義であるかのような、きびしい国際政治の現実を身を以て経験した。そしてその中から知り得た貴重な経験は、法律も軍事も政治の在り方も、イデオロギーや宗教の違いや國の方針だけでなく、その立場に立つ人の人格や考え方の如何によって大変な差の出ることを発見したことである。満州で政権を握っていた頃の日本人の場合も同様であったことを改めて思うかべて、私の人生観は大きく変り今後の生き方に一つの目標を見出したのである。

人、人、人、すべては人の質にある。

すべてのものが、「人」によって行われるとすれば、眞の平和達成は慈悲心と勇気と正義感の強い人間を一人でも多く作る以外にはないと気づき、万一生きて帰国出来たら、私学校でも開いて志のある青少年を集め、これに道を説いて正義感を引き出し、勇気と自信と行動力を養わせて、祖国復興に役立つ人間を育成しようと決心するに至ったのである。

* * * * *(第一章 少林寺の建立と金剛禪の成立)* *

少林寺建立の原点

少林寺拳法有段者ならば全員所持している少林寺拳法教範第一章の“少林寺の建立と金剛禪の成立”

の引用である。少林寺建立の原点は、まさにこの第一章に凝縮されている。この文章の一言一行に歴史の足音がひびき、宗道臣師家によって発見された真理の背景が鮮明に映る。

人間は魂と魄とともにたずさえた動物である。ダーマから魂を与えられた唯一の動物であり、その活用しだいによってはすばらしい世界を築く事が出来る。だがひとたび、人間ならではの、ダーマの特性と人間の靈性、を忘れた時、たちまちあたりは修羅場と化す。第一行目の文章にあるように、国際間の条約などは自国の利害の為には全くあてにならないホゴ同然である。（事実日ソ不可侵条約は、勝ちいくさの分け前欲しさに、条約終結期限をあと8ヶ月も残して一方的にソ連が破棄した。信義のかけらも見当らないソ連の指導者は、すぐた形だけ人間であって魂をもたない動物の格好の見本である。）魂を忘れた人間は、何もソ連だけではなかった。日本人でもその例外ではなかったという。敵国のキャタピラの音が聞えてくると、命を賭しても、日本人を守るべき天皇の股肱の軍隊が、丸腰の民間人の婦女子や子供を見捨てて、さっさと逃げてしまう。しかも、将校達は自分の家族だけは引きつれていたと聞く。極限状況下では人間である事を忘れるのは止むを得ぬと云えるかも知れぬが、中には、最後の最後迄、人としての守るべき道を全うして生き抜いて来た人もいたのである。いまや日本の巨星ともいえる宗道臣師家はまさにその人である。

敵国人からも愛される

師家は日本人は勿論のこと敵対国家であった中国人とさえも、国境やイデオロギーをこえた人間と人間のふれあいを実践され、見事に極限状況を生き抜かれた。そして、そこから『法律も軍事も政治のあり方も、イデオロギーや宗教の違いや國の方針だけでなく、その立場に立つ人の人格や考え方の如何によって大変な差が出る。』という偉大なる真理を発見されたのである。「人、人、人、すべては人の質にある」そして、「すべてのものが人によって行なわれるならば、眞の平和の達成は慈悲心と勇気と正義感の強い人間を一人でも多く作る以外に道はない」という実践の息吹があつくはき出される。簡単で、誰にでも理解出来る、そのくせおそらく死ぬ迄到達がむずかしい、人間完成、へ至る道はここに開かれたのである。

完膚なきまでに打ちのめされた人間が、あすの命の保証のない極限状況下で、祖国日本の復興を夢に描く姿に我々は前途に賭ける人間の可能性の無限を感じ、生きる事の大いなる喜びと勇気が与えられる。

少林寺拳法を行じて人間完成を目指し、社会の指導者となって理想的な平和社会を建設しようとする拳士たちは特にこの文章を暗んじていなければいけない。本山には努めて帰山し宗道臣師家から直々の法話を拝聴し、今まだなまなましい生きた昭和史を学ばねばならない。間違いない史実、その中に秘められた“人の質”。そして二度と起こしてはならない悲劇の結末を、後続する若者に語り継がなければならない。その為には関係する歴史書、正確な史実に基いた関係小説、そして同じ目的の為に催される他分野での催事等々。寸陰惜しむ事なく、あらゆるものから我々には学ばなければならない。「人、人、人、すべては人の質にある」というこの、「人の質」、そして「かくあるべき姿」は、教範第一章を指標として、自らの學習で自らが見つけ出さねばならない。そしてその姿に到達する事が修行の目的でもあるといえよう。(たとえば読売新聞社主催、戦争展)は毎年終戦記念日から二日の休みを含む12日間開催さ

れ、のべ60万人の人々が集る。34年の歴史のへだたりをいっきに逆もどりして、昔そのままの幻に再開し、まだ癒えぬ戦争の傷あとにうずく心を抑えきれず、老父母が、兄弟が姉妹が戦友が、嗚咽し、慟哭する。そして不戦の誓いを見事、次代の若者に伝えているのはすばらしい。)

(3) 敗戦後の日本と日本人の姿から

* * *(少林寺拳法教範)* * * * *

そうして昭和21年の夏に、残留をすすめてくれる中国人有志の好意を振り切って帰国したのであったが、夢にまで見た祖国は戦火に荒れ果てており、敗戦直後の混乱期であったとはいえ、道義も人情もすたれてしまつてあとかたもなく、日本人同志が互にいがみ合い傷つけあって、自分達だけの幸せを願い、他人の不幸は見て見ぬふりをすることにならざっていた。驚いたことに九千万人以上も実在する、日本人の祖国日本本土に於て、武装している占領軍はやむを得ぬとしても、それに便乗する僅か数十万人の第三国人にまで無条件降伏をして之に屈従し、卑屈極まる奴隸のような態度をとるものが多く、街には至る所で赤旗が立ち、外国旗がはためいて、不正と暴力が白昼横行し、道義も秩序もない弱肉強食の修羅場が現出していたのであった。

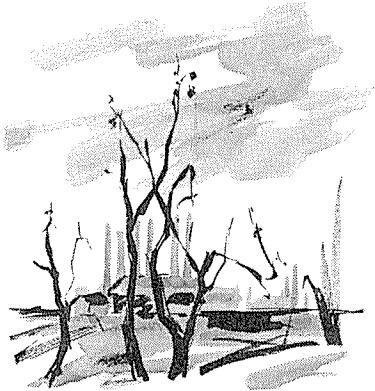
祖国の将来を担うべき青少年の多くは、将来に対する希望を失い、苦しい現実から逃避するために、目前の享樂に我を忘れようしたり、或は反動的に過激な外国思想を受け入れてそのとりこになり、祖国を見失つて、日本人であることを忘れかけている者が増えていた。

敗戦によって、民族の誇りと自信を一挙に失った大人達は、完全に茫然自失してしまい、何等なすことを探らず、之等の青少年を放置するだけでなく、自らも又ギャンブルや享樂にうつつをぬかして希望のない人世からの逃避をくわだてたり、亦一部の者はあやしげなる現世利益を説くたなほた式新興宗教によりどころを求めて一層まよいを深めるなど、国民の大多数が将来の希望もなく右往左往していたのが当時の実状であった。

このような悲しむべき日本の状態は、私がかって外地で見聞して来た、一部の亡國民族に共通する姿であり、これをこのまま放置すれば、やがては輝かしい伝統を持つ誇り高き我が日本民族の将来に、暗い影を残すことになりかねないと考えて、生意気なようだが余後の人生を青少年の育成に捧げ、もう一度日本人をして世界の他の民族から、信頼と尊敬を受けるに足る民族に育てる手伝いをしようと決心し、帰国してから働いて得た僅かな私財を投じて多度津町に小堂を建設し、道を説きはじめたのである。

* * * * *(第一章 少林寺の建立と金剛禪の成立)* *

前掲資料、「金剛禪の原点について」は、敗戦後の日本と日本人の姿を次のように生々しく説明している。



空襲で焼け野原となった大阪。
関電の八本煙突。

一夜にして崩れざり代りに虚脱感と不信感が入り込んだ。昨日迄は神國不敗を説き、ビンタを張った先生は、一転して民主主義を説きはじめた。教科書は墨で塗りつぶし、腹は減り、食い物はなかった。復員して来た青年達は社会から余計者視され、特攻くずれとのしられた。自暴自棄が多くの青少年の心をとらえ、天皇中心の軍国主義教育に対する反動と生活苦から、多くの若者の心から祖国日本は消滅したかに見え、代って祖國はソビエトでありアメリカであったりした。このような社会の状況の時「我々は祖國日本を愛し、日本民族の福祉を改善せん事を期す」と声を大に叫ばれる宗道臣師家にどれだけの勇氣が必要であったかは、今から思えば想像を絶するのである。

大人たちは完全に茫然自失であった。闇市、パンパン、遅配、欠配、栄養失調、爾光尊、かすとり雑誌、ストリップ、ダンスホール、キャバレー等、ひどい時代であったのである。又、一部の人は、生活苦からあやしげな宗教とか、先祖のたたりを強調した新興宗教にこって、自分から耐える事をせず、他力で自分の苦しさをとりのぞこうとした。（「金剛禪の原点について」26P 終戦直後の日本と日本人より）。

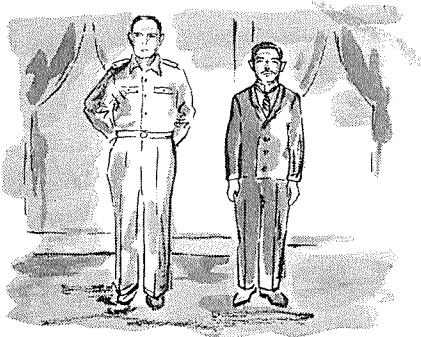


切符を売った金で露
命をつなぐのは、我
が身か家でまつ子か。

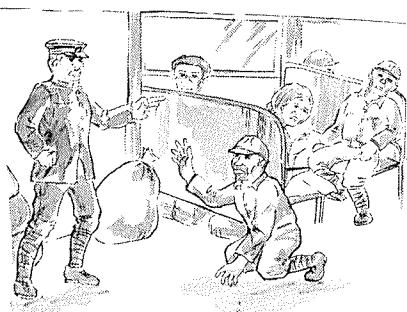
誇りを失った日本人

敗戦下の日本は、武装している占領軍は、満州に於けるソ連軍の乱暴程ひどくはなかったものの、これに便乗する第三国人の横暴は、目に余るものがあり、国民のほとんどは事態に不惑症になるか、見て見ぬふりをし、宗道臣師家のように決然と起ったという事はほとんどなかった。

又、青少年は、祖国を忘れていた。純粹に生きて来た青少年は、ひたすら天皇陛下の為に、この一点に身も心も捧げつくすように教育され、又信じ行動して来た。それが一転して敗戦、昨日迄の価値感は



占領下 天皇陛下、マッカーサーを訪問。
(20. 9. 27)



同じ日本人同志で……。
配給では食えないから、ヤミ米を運ぶ。そ
れで多くの人の飢がしげた。しかしそれ
を警察は文句なしにとりあげる。自分もそ
れをたべているくせに。



今日の船にも我が子は乗っていなかった。
とどかぬ願いと知りながら……。

みれば、「ここは日本なのに！ようやく祖国に帰りついたのに！この姿は何んだ！」茫然自失したのは、帰ってきた人々の方だろう。だがこの帰還者たちも、たちまちこの渦に巻き込まれてゆくのは時間の問題であった。

燃える祖国復興の夢……少林寺の建立

ところが、この道義のすたれた日本人の姿をまのあたりにみて、宗道臣師家の胸には、あの極限状況下で芽はえた“青少年育成による祖国復興の夢”がふたたびはげしく燃えあがるのを禁じ得なかったという。

「若者を育てよう」

「正義の為に身体をはれる、ひとくせもふたくせもある若者を育てよう！」

「こんな若者が団結すれば、やがて日本は力強く再起出来る事は可能だろう！」



親を失い、
家も焼かれ、
たべものもなく
ただたむろする浮浪児たち。
この子たちに明日はなかった。

宗道臣師家の胸はほとばしる祖国再建の激情に燃えに燃えた。かくして、
「再び日本をして、他の民族から信頼と尊敬を受けるに足る民族に育てなおす為に！」
「日本人に新しい眞の愛国心をうえつける為に！」
少林寺は建立されたのである。

今日の繁栄は先輩の努力の結晶。

34年の歳月は流れた。少林寺の思想は物質文明におぼれた若者の空虚な胸を満たし、少林寺拳法の秘技は、見事若者の心を魅了した。宗道臣師家と生死は共に！と誓いを立てた当時の若者は、一丸となって奔馬の如き力強い行動力で、今日の発展の礎となつた。今、少林寺というだけで社会で信頼される我々は、それが実にこの当時身体を張って生き抜いて来た先輩達の純粋で一途な行動力の結晶のたまも

のであるという事を決して忘れてはならない。

次代は我々の手で。

がしかし、時は刻々と流れる。次代を担う責を負うのは、あとに続く我々若者である。敗戦後の無秩序、無法の世間を知る人は、少林寺の指導者の中でも数少い。それだけに、あとをひきつぐ若者たちは当時の悲惨な状況下で、日本の復興を目指して建立された少林寺の原点を確実に頭脳にたたきこんでおかなければならぬ。戦後生れの人々が人口の半分を越えた今、これを語り継いで次代にバトンを渡してゆくことは今の日本にとって急務の仕事と言える。それは決して政治的に催される形式的な儀式だけではない。金も名誉も全く考えもしない。ただ情熱をもって人生を生きる人々が、それぞれの職業のそれぞれの分担を生かして、心から心へつなぐ人間愛の仕事なのだ。少林寺の主人公は実に我々若者達である事を知るべきである。

不滅の教範。

釈尊自らが書き遺された教典というものはない。すべて「如是我聞」ではじまる。それが人々に口づてに伝えられるうちに、「正しい教え」は根本から多岐に別れ、死者儀礼を職業に持つ以外には、人も救えず自らも救い得ぬ悩める姿を露呈している現代仏教。我々はこの姿を他山の石としなければならない。少林寺に如是我聞はない。教範がある。我々は常に容易に原点に回帰できる。しかも教範は年輪の積み重ねと共に、その内容はますます豊かになってゆく。教範は不滅である。我々はこの大道を教範と共に歩まねばならないのである。

瞑想の中で、もう一度、宗道臣師家の姿を思い浮べてみよう。あの豊かな体躯からほとぼしのバイタリティー。無意識に引き込まれてしまう魅力的な話術。政治、経済、外交に関する厳しい洞察力。判断力。我々は師事する事に無上の喜びと誇りを感じて、常に胸を張っていられる。

しかし見落してはならないもっと大事な視点がある。表面に漂う春風の如きほのぼのとした慈顔にたいし、裏面に秘められた凜と張りつめた秋霜の厳しさである。少林寺拳士八十万を老軀一人で背負って仁王立ちされるあの不退転の厳しさ。残念なことではあるが、最近全国のあちこちでポツリ、ポツリと起る不祥事。しかし師は一つといえども、責任を回避される事もなく、「すべて自身の不祥事である。」と身一つに受けとめ、世間には「喪に服す。」と自らを責めて責任の所在を明らかにし、不肖の門下である我々に対して肉親以上の愛と厳しさをもって諭される。この姿を見て我々は自らの背筋を正さずにはおられない。

よどみに浮かぶうたかた。

『慣れ』は恐しいものである。頭ではしっかりとしているつもりでも、不思議な事に行動は頭と反対の方向にいってしまうことがある。少林寺は、我々拳士をぶくぶくに太った養殖の鯉に育てる為に建立されたのではない。岩を噛む清冽な水に引き締った細身の体を踊らす若鮎を育てる為にあるのだ。岩のはざまからこぼれ落ちる一滴の水、それは清冽な溪流となり、やがてはゆるやかな流れの大河となって大海に入る。だがその中途で必ず暗いよどみが生れ、そこにはむなしいうたかたが浮ぶ。我々はこのような

よどみに浮かぶうたかたになってはならない。原流に逆のぼり、再度本流に乗って見事大海に流れ入らなければならないのである。

原点に帰ろう。

大会は年を追って盛大になる。年を追うごとに世間の理解は深まり、支持者は増える。これ程うれしい事はない。しかし、いかに理解され支援の手をさし述べられようとも、それは行動する我々あっての事である。我々が一つの汚点を落しても、支持者、理解者を裏切る事になる。そうならない為には原点に帰る以外に道はない。諸君、原点に帰ろう！そして脚下照顧だ！。ひたすら金剛禪の道を歩む我々に、私利私欲、名利名聞などがあり得ようはずもなく、まして未熟な自我の芽の摘み切れない指導者が自分の性格に都合よく引っぱり込んで来た身勝手な少林寺をもって世間様に道を説くなどはもっての外である。再度いおう。少林寺建立の目的は、正義感あふれた勇気ある行動力をともなった人間を育成し、同時に連帶による強力な団結で社会の建設に益する事にあるのだ。

金剛禅の原点

そのII

正しい釈尊の教え

金剛禅の思想の原点は、釈尊の正しい教えにある。引きつづき教範第一章を引用しよう。

（少林寺拳法教範）

しかし残念なことに、理屈やお説教だけでは、誰も二度と聞こうとはしてくれなかつた。
しかし、その当時に於ても青少年のすべてが享楽主義者やニヒリストばかりではなかつた。
現状に不満を感じて理想を追求する多くの青年達が居り、何かを求めていた。その何かがわからず右往左往し、自己を見失いかける者も生じかけていたのである。彼等の中には、その理想境をマルキシズムやカトリシズムに求めていた者もいたが、しかし内面的な深さや物心両面の安らいを求める人達は、どのいすれにも満足出来なかつたようである。

最も理想的であり、而も人間性の深さを究明して、物心両面の安らいを得られる教えは、いろいろの思想や、宗教遍歴を経て来た経験から、釈尊の正しい教えをおいては他にないと私は考えていた。しかしそれは葬式や法要や読経や祈祷を業としているような、現代の寺院仏教でないことも明らかであった。

そしてまた、呪術やまじないをして厄よけを保証したり、死後の極楽や地獄を説く仏教ではなく、亦人間性を否定するような、守れもせぬ戒律を強調したり、時代ばなれの苦行を強要する仏教でもなく、また口先だけの悟りや理論一点ばかりの口頭禅でもなく、人々が現世に於て誰でもが、精神的なよりどころにできる内容を持ち、而も心身共に安らいを得て、物心両面の生活を豊かに楽しくすることが出来る、正しい釈尊の教えでなくてはならないと信じていたけれども、現実の組織化された佛教教団の中には、そのようなものは

一つとして存在している様子もなかった。

実際問題として、現代のような複雑な社会構造のもとで、弱肉強食を立前とする資本主義経済の、激しい生存競争場裡を生き抜かなければならない現代人が、いくら道を求めるためとはいえ、仏法を求める総ての人が、妻子や仕事を捨て出家したり、山や寺院にこもって三年も五年も、只管打坐して安心を得ようとするようなことは、とても一般の人には不可能に近いことである。どうすれば正しい仏法を現代に生かすことが出来るであろうかと思い悩んでいた頃のことである。

＊＊＊＊＊(第一章 少林寺の建立と金剛禪の成立)＊＊

迷える若者たちのために

壊滅した日本に立って、宗 道臣師家が眼のあたりに見て、ショックを受けられたのは、自立心を失い、道を見失った若者が享樂にうつつをぬかす姿や、働きもしないくせに変にしらけて見せるニヒリストの姿であった。反面、現状に不満を感じ、理想を追求する若者もいるにはいたのであるが、ただその手段の何たるかを見つけ得ず右往左往していたのである。この時、宗 道臣師家は、彼等を正しく導くべき道、即ち、「最も理性的であり、而も人間性の深さを究明して、物心両面の安らいを得られる教え」は、いろいろの思想や、宗教遍歴を経て來た経験から、「釈尊の正しい教え」をおいて他にない、と迷える若者達に道を説かれる決心をされたのである。

(1) 正しい釈尊の教え

人は本来自己中心的であり、常に自分の望み通りになる事を求めている。しかし、現実はその望みとは正反対に不満、不足、不安、対立、抗争、苦痛、恐怖、別離、等の矛盾から離れられない。わけても一番身近な矛盾は生と死である。生きたいという欲望に対して、どうしても最後は死という結末にたどりつく悲しい矛盾。人の苦しみ（苦）は、すべてこの期待してはならない事を期待して生ずる矛盾から起るのである（集）正しい釈尊の考えを継承している金剛禪門徒の修行は、まずこの矛盾を当然であると自覚する事から始まる。そしてこの矛盾、即ち人生で次々と起る問題、を解決し（滅）日々の修行（道一八正道）を積み重ねる事から正しい知恵を悟り、苦から解脱して生死を超越した境地に己をれ導いて人間完成に到達するのである。

人はまず苦を知り、苦から脱却する為に真剣に悩み、その根元を見つけ出す作業をはじめる時、はじめて求道の旅立をする。つまり人生を知る良い機会に出会うということである。

さて、人は一人では生きてゆけない。ひたすら自己を練磨する「行」に平行して、他人にも手をさしのべることも大切な「行」である。迷える人に正しい宗教のあり方を教え、人間として生れた事の尊さを認識させ、人間愛に目醒めさせ、お互いが手をとりあって、生きてこの世に理想境を建設する「行」。本来、仏教とは、このように実践の宗教なのである。

今を大切に

ようやく咲いた桜花が一夜の雨に惜しげもなく散る姿は、生あるものはかなさの代名詞である。我々人間は百年生きるかも知れないが、明日死を迎えるかも知れない。すべてのものは移りゆく。（諸行無情）とすれば過去の因は今の果であり、未来の果は今の因である。いずれにしても、「今」の姿は過去の果であり、未来の因である。ならば「今」という「今」程大切なものはない。「今の苦しみ」も生きていればこそ起るものである。えてして老人は、今の苦から逃げて過去を語り若人は未来を語る。しかし、過去は過去であり、「今の充実」なくして未来の夢はない。老人も若人も、共通にして持つもの、それは「今日」でしかないのだ。この一期一会の尊い瞬間を充実して生きるよろこびをはやく見つけ出そうではないか。この刹那を努力する事が永遠に生きる事にもつながる。煩惱即菩提、である。弱気はすべて前向きに努力して生きる事が大切である。

修業とは、この苦から脱脚して生きるよろこびを知る努力をすべきであって、極端に走る、「修行の為の修行」は無意味である（中道）。あく迄も我々の修行は社会的環境から切りはなされたものであつてはならず、社会に応用可能ななかでの「今日を充実」する修行でなければならぬのである。

即ち、自己確立の道は自他共楽にそのまま通じる道であるといえる。その道をひたすら歩きつづけることが正しい釈尊の教えを生かす金剛禪の教えであるともいえよう。

心のよりどころ

我々は、一人では生きていけないから、多くの人々と連帶の輪を出来るだけ大きく広げて生きてゆく。

しかし、自分はやはり自分でしかなく一人である。ならば何を心のよりどころとして生きてゆくべきか。

この問に対して明快な答えがある。有名な自燈明・法燈明の教えである。

四十五年の教化活動で八十才の老令になられた釈尊は死に臨んで弟子の阿難に対して次のように説かれた。

「汝らは自らを燈明とし、自らを依りどころとし他をよりどころとする事もなく、法を燈明とし、法を依りどころとし、他をよりどころとする事なくして住せよ。」

釈尊の正しい教えを継承して、混濁する今の世に花開く金剛禪少林寺。縁あってその少林寺の門を敲いた我々は、少林寺建立の礎石の一つである正しい釈尊の教えを、もっと広く、深く、時間をかけて学んでゆかねばならないのである。



釈迦如来像

のちの人は、釈尊の姿を悟れる人としてこのように想像して崇拜した。しかし仏教の根本は、偶像崇拜でも多造寺塔でもなく、真理を悟り自らを確立する自力の宗教である。

(2) 釈尊教団と金剛禪教団の比較

我々少林寺拳法を行ずる拳士は在家でありながら金剛禪總本山少林寺に籍をもつ仏教徒である。金剛禪教団のあり方が釈尊教団のあり方に原点を見る以上、釈尊教団のあり方を知り、もって金剛禪教団のあり方を認識すべきである。再び「金剛禪の原点について」から学ぼう。

①教団のあり方………同志相親しみ相たすけ

『弟子たちよ、ここに一法あり、聖なる八正道を起すに利益多し、その一法とはなにか、いわく善き友のある事である。』阿含経

釈尊はくり返し「よき友」の価値の力を説いておられる。人間同志の精神的な結びつきが釈尊教団の純粋な姿であったし、釈尊一人を師と仰ぎ、すべての弟子が同じ情熱と使命感で固く結ばれた同志として自覚を持つ事が教団組織の基本的な姿であった。

“我等は法をおさめ身心を練磨し、同志相親しみ相たすけ相ゆずり、協力一致して理想境建設に邁進す。”我々拳士は信条を口に出して誓う度に、宗道臣師家を師と仰ぎ、「法^ハ」をよりどころとし、同志が同じ情熱を燃やして固く結びあう自覚をもとうではないか。

②教団の目的………自己確立と自他共楽と

一人のバラモンの僧が釈尊に問うた。

『あなたや、その弟子達を見ているとつまりは自己を調御し、自己を安立する事に専念しているよう見受けられる。それはいわば自己一人の招福の道ではないか。神の前に祭祀を営み、供物を供え、他人の為に招福を祈る自分達バラモンの方がはるかにすぐれていると思うがどうか?』

「上求菩提」か「下化衆生」か、「自利の行」か「利他の行」かの問い合わせである。金剛禪でいえば「自己確立」か「自他共楽」かという論難である。

釈尊はバラモン僧に答える。

「私は人々に対して次のように説いている。『これが道である。これが実践である。私はこの道をゆき、この実践を修して煩惱すでに尽き、解脱する事を得た。お前たちも来て共にこの道を行き、この実践を修して煩惱を滅尽し、解脱を得るがよい。』と。このように私が法を解き、他の人々も又同様に修業して解脱を得るもの数百、数千、数万に及ぶならば、バラモンよ、あなたはこれでもこの道を一人の為の幸福の道と思うか。」バラモンは遂に納得して釈尊に帰依することになる。又釈尊が鹿野苑において最初の五人の弟子に説法を終えたのち、釈尊は次のように語った。

「弟子たちよ、私は人の世界のすべてのわなから自由になった。お前たちも同様である。弟子たちよ、いざ遊行せよ。多くの人々の利益と幸福の為に。世間を憐み、人々の利益と幸福と安樂の為に。」人間はたった一人では生きてゆけない。釈尊はそれ故に人々に道をとき、弟子たちを伝道に派遣するに当つても、はっきりその目標を「多くの者の利益と幸福と安樂の為に。」と語り、それにより千万の人々が開眼し正しい人生につく事が出来たのである。多くの人々を導く為には、「まず、この道を行き、実践を修して解脱する。」のが先決で、自己の確立が疑いもなく先駆する。

「盲人がもし盲人の手引をすれば、二人とも穴に落ちるであろう。」宗道臣師家のいつも口にされる

我々への明快な教示である、「半ばは我が身の幸せを、半ばは他人の幸せを」、この何気ない一語にどれだけの重みが藏されていることか!」

③教団のよりどころ………深く三宝に帰依し

釈尊教団は、釈尊一人を師と仰ぎ(仏)、その教え(法)を深く心に刻み込んだ僧侶の同志たち(僧)の自己確立を目指す精進と多くの人々を自覚させることによって心の安樂を得させようとする使命感によって支えられていた。後世の仏教教団の本来の姿もかくあらねばならないはずであったが、周知のように本来の姿からは遠くそれてしまっている。我々金剛禪教団はその現代仏教教団が忘れさり形骸化するにまかせた三宝を真に力強い生きとした内容で持っている。しかもこの三宝によろこんで帰依し、自信をもって行動する事が出来る。

第一に我々が敬慕してやまない道の師、宗道臣師家である。あの大きな体軀からほとばしる使命感。触れるものを魅了し勇気づけずにはおかぬ温容な力強さ。快刀亂麻を断つ明晰な判断と決断力。率先陣頭の行動力。ここに我々は偉大なる導師に相逢うことを得た。

第二は、偉大なる師の導きによりダーマの分霊としての人間の尊厳と拌みあい、助けあいの心を得た。

第三は、同志を持っている。相たすけ、相親しむ僧侶である。そこには友情と信頼の深い絆に結ばれている。この輪を広げていって、平和で豊かな理想境を建設してゆくのである。宗道臣師家。ダーマの教え、深い連帯の同志、この三宝に帰依出来る事に深い喜びと誇りをもって、たゆまず前進してゆかねばならない。(金剛禪の原点について P.30 原始仏教教団のあり方と金剛禪教団)

物で栄えても心で滅び、生きる依りどころを失った現代は、ますます混迷の淵に身を沈めているが、釈尊の打ちたてられた仏教が、再び宗道臣師家の手で若者たちに正しく伝承され、その法燈が社会の隅のあちこちに点滅しながら、今や燎原の火の如く広がりつつあることは実にすばらしい事である。その燎原の火の如く広がる法燈の一本一本をかけている自分に限りなき誇りをもつ。友よ!挫折する事なく頑張ろうではないか。



黄昏にひびき渡るいりあいの鐘。人知れずもの哀しさの感じられるこの時、宗教心がめばえる。そしてその時が正しい宗教のもっとも大切な時でもある。

金剛禅の原点

そのIII

正しい武道論

* * (少林寺拳法教範) * * * * *

ある夜私は夢を見た。夢の中に鬱ぼうぼうの達磨が現われて、私に何か指でさし示しながら、スカスクと先に歩いて行くのである。不思議なことに私の足は地について動かぬので、夢中で達磨に向い「待って……」と大声で叫んだ。その自分の大声に驚いて目覚めた私は、考えている中にハッと閃いたものがある。そうだ、達磨が自分についてこいと言っているのだ。これこそまさしく達磨の啓示に相違ないと確心した。そして口先ばかりどんな立派なことを言っても、決して人よろこんでこれを修業しようという、興味と内容のあるものを人集めの手段にしなければならぬと気付いた。

そのためには、自分が若い頃に情熱を燃やすことが出来た、達磨が伝えたという印度伝来の阿羅漢之拳を教えながら道を説けば、必ず成功するとの知らせであると理解した。それに勇気づけられた私は、拳を主行とする新しい道を開創することに踏み切り、自宅の奥の空地に六十畳の道場を新築してこれを本山とし、宗教法人として認証を受け再発足したのである

* * * * * (第一章 少林寺の建立と金剛禅の成立) * *

少林寺拳法は「宗門の行」である

少林寺拳法は単なる武道でもスポーツでもない。金剛禅少林寺の門徒である我々が自己確立を目指して励む「宗門の行」である。と同時に師弟間の、仏弟子間の心のかよいあいと固い結束による実践と行動



嵩山少林寺白衣殿に残る壁画。昔の僧たちはこの絵が証明しているように二人が相対して攻防を技を組み修行していたものである。（少林寺拳法教範より）この壁画の修復を日本の少林寺が行う事になった。

力を生み出す「手段」でもある。

そもそも少林寺拳法は次のような歴史的背景をもつ、時は今から約1450年の昔にさかのぼる。釈尊の28代目の法燈を継がれた達磨大師は、すでに誤った姿で仏教の流傳している中国に、釈尊の正しい教えを伝える為に印度よりはるばると天山南路の険阻を踏破して中国に渡られた。しかし大師は謁見した梁の武帝に受け入れられず嵩山少林寺に陰棲され、そこで、印度伝来の阿羅漢の拳を仏弟子に教えられたのである。少林寺の拳はこのように坐禪行と共に易筋行として仏弟子の修行の手段に用いられた。今日、日本で見事開花した少林寺拳法の源流はここに存するのである。又1900年の義和団事件に見られるように最後は自国政府の裏切りによって敗滅したものの少林寺の拳とその教えは列強の侵略にたいして身を投げて抵抗した中国民衆の大愛國運動の精神的な糧であり、連帶の手段であった。我々少林寺拳法は、ふりかかる火の子は強すぎる程払え！という考え方には内には秘めているが、あくまでその主張は勝敗を目的とせず、組手主体でお互いの技術の向上をはかり、出来るだけ多くの人々と連帶して、よりよい社会を築こうという、まさに排他的、独尊的で勝負術としかいえない現在の武道をはるかに超越した人造りの手段であり、国造りの大道であるということを忘れてはならない。

行 は 「」

又、人間完成の為の「行」は「」という、親が子を背負い、その子がやがて成人して親を背負う、拝みあいたすけあいの姿をあらわした「行」であって、極限状況に追い込んで、ひたすら自分に耐える事から忍耐力を養い、自己確立をなしたり、という意味の「行」ではないのである。

少林寺は「行」を「養行」としているが決して「樂行」ではない。少林寺はすばらしいという言葉に



達磨大師

陶酔して、自分がすばらしいという錯覚に落ち込んだ時、それ迄の修行は水泡に帰す。そして自分が奈落の底に落ちるばかりか、周囲の人々をも同時に奈落の底に引きこむことになる。だから「行」には必然的に厳しさはつきもので、厳しさのない「行」から自己確立はあり得ない。急激に短期間に凝縮した鍛練の成果はその一瞬に力は発揮されても永続性はない。

継続は力なり

一步一步階段を登るが如く鍛錬を続けてゆくとその過程において力が生まれかつ永続する力が備わる。そしてそれが自分の為ばかりでなく、相手と共に！という教えから他人にも手をさしのべる愛が育くまれる。ふりかかる火の子を独力で払い得る力の維持、正義を行使する為の裏付となる力の維持はたゆまぬ努力の積み重ねからしか生れないが、それ以上の力を拳技に求めて修行しても得られるものは「無」と知るべきであり、慈悲心、正義、倫理、勇気、行動力等人間の精神の高揚と確立を拳技の修業に求めなるならば、その修業の目的は「無限」である。

最後にかかる教範第一章の結びの文は、正しい武道としての少林寺拳法と金剛禪の成立をわずか数行で見事にまとめてあげられている。我々拳士の行動の規範はこの文章にある。この文章こそまさに金剛禪の原点の集大成である。



少林寺拳法教範

この私が中国で修得して来た北少林義和門系の阿羅漢之拳と称する、印度伝来の宗門の行として拳は、一般の武術とは本質を異にし、相手を倒し、相手に勝つことを目的とするものでなく、己に克ち、心と体を整えて、技術を楽しみながら自他共に上達を図るという特殊なものであり、護身練胆と、精神修養と、健康増進の三徳を兼ね備えた法である。これを教えながら道を説けば、道を求めてくる青少年に、不屈の精神力と金剛の肉体を同時に鍊成させられると共に、尚その上に自信と勇気を与えることが出来るので、一石三鳥の効果を確心し、ここにこの道を「拳禪一如、力愛不二」の法門として編成し、古代印度に於て、阿羅漢之拳を創始したと伝えられる仁王尊の神名、金剛神の御名をとって、金剛禪と名付けたのである。そして中国で学んだ各種の拳技を整理再編し、之に理論の裏付けを行って宗門の行としての形を整え、新しい道として伝道を始めたのが、今日の正統少林寺拳法であり、それを「行」とする金剛禪が成立したのである。

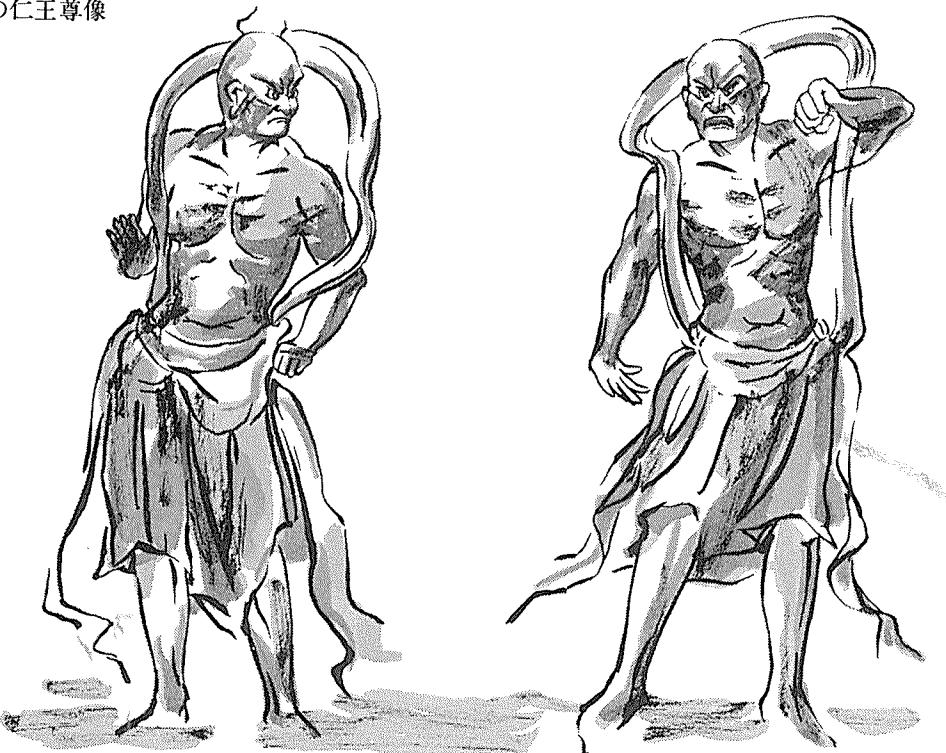
＊＊＊＊＊(第一章 少林寺の建立と金剛禪の成立)＊＊

おわりに

我々実業団拳士を筆頭とした1979年度第一次指導者講習会で師家は次のように訓導された。

宗門の行としての少林寺拳法の目的

二つの仁王尊像



(1)何よりもまず仁王尊像の剛快なる姿が象徴するように氣力体力が全身のすみずみまでみなぎった金剛不壞の剛健なる身心を不斷の練磨によって築き上げる事（自己確立）

(2)阿吽、陰陽二体の仁王尊像の調和が示すように、本来相互対立した存在である人間同志が、その対立を止揚して、立てあい、生かしあい、拌みあう調和の世界の実現を目指し日常の行動を通して身近なところから良い縁を育てる事（自他共榮）

(3)仁王尊像の表情が端的に物語っているものは、現世のもろもろの不正に対する悲しみを深く内臓した怒りのほとばしりであり、真の慈悲の姿である。惡に向って文字通り仁王立となって立ちはだかる勇気と正義感を平素の修行によって養う事（理想境への挺身）である。

「修行への留意点」

これらの目的を成就する為に拳士は次の点に留意して修行にはげまなければならない。

(1)自ら汗を流して

少林寺拳法は教育の手段としてすぐれている点は、手を握あい、技をかけあうふれあいを通じて教えるものに対する信頼の芽えが容易に可能である。大切な事は共に手を握り共に汗を流す事である。

(2)みんなの中でみんなと共に

少林寺の特徴である組手主体は相手が強くなる為にも自分が強くなる努力を払うという事である。出来ない事が出来るようになったことをお互いが心から喜び合い間違いは皆で正しあう。このような修行の積重ねから一人では生きられない世の中の実相や、人間関係の大切さ、すばらしさを得て出来るのである。

(3)誰でも、ここ迄………。

少林寺拳法は勝敗を目的とせず、しかも漸々修学により段階的に向上、進歩をはかるシステムになっている。従って誰でも、まじめに努力を積み重ねさえすれば一定の段階に達すればすぐ上の到達可能な目標が目前にあり、こうして継続すればする程自己可能性に対する信頼、自信が増幅される。これは特別な素質や能力に恵まれたものしか選手になれずそのような選手を生み出すことだけを目標とする現在のスポーツや武道では到底考えられないものである。

少林寺拳法を行ながら人格陶冶を目指す我々は、今迄述べて来た昭和史の原点、根本仏教論、正しい武道論から、教範を機軸とした、たえまぬ學習で知識を積み重ね、実踐行動のよすがにしなければならない。仮に今、我々が、実踐途上にあって不幸にして、壁に当って前途を見失い、煩悶のあげく「少林寺拳法とは何か？」と自らに問いかけた時この“二つの仁王尊像”的解説ほど適切な答えは他にはないだろう。そして、修行への留意点の三つはなんとやさしい、さわやかな迷えるものへの導きであろうか。少林寺拳法実業団拳士諸君！我々は未だ若い。一人一人は会社機構の歯車の一つの歯にすぎないかも知れない。厳しい現実に追われる日々であれば、時として機械の歯車とならぬ自分にため息をつく時もあるだろう。しかし、見よ！この大会を！我々には、すばらしい師家が健在である！すばらしい理解者がたくさんバックアップして下さる！すばらしい仲間がいる！なんとすばらしい生きがいであろう。

今日の日を大きな礎にして明日へ向ってお互い元気にはばたこうではないか。



うぬぼれでない自信をもって、誇り高く
今を生きよう。

大会実行委員

審判司

(五十音順)

実行委員長	小笠原国勝	七段正範士
総務委員長	松本一男	七段正範士
委 員	峠 徹・高倉正明・中西典昭・木村惠昭	七段准範士
財務委員長	木村惠昭	七段准範士
進行委員長	峠 徹	八段正範士
委 員	高畑克昭・奥村真邦・小串信之	七段准範士
競技委員長	竹之内慶二	八段正範士
委 員	寺村正美・増田勉・花畠猛	七段准範士
設営委員長	高倉正明	八段大範士
委 員	福田つよし・福田丈夫・高橋幸夫	八段正範士
接待委員長	大西宏之	七段准範士
委 員	松田守生	七段正範士
記録委員長	加藤忠	七段正範士
委 員	浦和広・高橋章・山本泰治	七段准範士
統制委員長	棚野洋一	七段正範士
委 員	森道基・小城克未・河原清三・堀田敏郎	七段正範士
広報委員長	中西典昭	七段准範士
委 員	柳田重之・安田静司	七段正範士
医 務	中西憲司医師・	七段正範士
地域準備委員		七段准範士
関 東 地 域	松木長寅・工藤明・安在孝夫	八段正範士
東 海 地 域	山下咲雄・進藤勝則	八段正範士
中 国 地 域	板谷時男	七段准範士
四 国 地 域	渡辺邦弘	七段正範士
九 州 地 域	藤田晋治	八段正範士
静岡・北陸地域	菅尚武	八段大範士
北海道・東北地域	甲斐哲夫・鈴木信一	

お礼のことば

大会実行委員会一同

合掌、香高い菊の花に彩られた、ここ枚方市松下体育館に於いて全国実業団支部が結集し、1979年度少林寺拳法実業団全国大会がかくも盛大に開催されましたことは、ひとえに各界の諸先生方の深いご理解と絶大なるご尽力、ご支援の賜ものと、関係者一同衷心より厚くお礼申し上げます。

月日の経つのは早いもので、省みれば1年半程前に実行委員会が発足して以来、未経験に無知が手伝って、一進一退、迂曲を繰り返しながらも無事、本大会を迎えるに至りました。そのなかで、或る時には自らの行動をもって、事の解決にご尽力を賜わったり、又、私達を励まして下さりながら直接にご指示を戴いた、小川 鍛先生・小南 曠先生には身に余る光榮と深く感謝申し上げます。又、かつて経験することのなかった財界挙げてのご配慮、ご支援に預りましたこと、実行委員を代表致しまして、重ねて厚くお礼申し上げます。

次に、少林寺本部事務局をはじめ、諸先輩の先生方には、多大なご指導とご支援下さいましたことに対しては厚くお礼申し上げます。最後に、私達はこの貴重な体験を決して無駄にすることなく、益々職場での有為な人材となるよう努力し、眞の幸福運動のリーダーとして一生懸命邁進致しますので、どうか今後共ご支援、ご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。ありがとうございました。結 王

結 手

編集後記

実業団全国大会の趣旨は、云うまでもなく大会宣言にあります。しかしこの大会には、もうひとつの大きなねがいがあるのです。それは「金剛禪の原点への回帰」であります。大会は年を追うごとに盛大になります。各界各層より寄せられる理解はますます深まり、支持は厚くなるばかりです。今大会も、言語を絶する多忙の極にあられる財界の先生方が公用として少林寺の為に東奔西走して下さいました。その姿に接するたびに私達実行委員の面々は感涙にむせび、動脈は充血して呼吸は苦しくなる経験をたびたびいたしたものであります。私達は、今大会を契機としてますます意欲をもりあげ、実践行動を通じて必ずご期待にそえるようにと誓いを新たにするものですが、その為には行動の規範として「金剛禪の原点への回帰」がなんとしても必要になるのです。パンフレットにこれを特集しましたのは、この為なのであります。

赤ん坊のちっちゃなこぶしのようなかたちをした、ところどころ白くそして赤紫色の可憐な花をつけた沈丁花が、時おり春の淡雪をかぶりながらも、かたちに似合わぬ強い香を放って春をいざなっている頃にこの「金剛禪の原点」を書き始めました。

教範を読むこと幾十回。教範が余りにも至高なるが故に、これをもとにしてペンを持つことなど、とてもとても……ありました。金剛禪の教範を手元にもちながら、愚かにも金剛禪の原点を求めて、本屋を巡り書をむさぼりました。しかし、彷徨のあげく見つけ出し得たものといえば、何ひとつみ得ていない失意の自分の姿がありました。満身創痍になってといえば大げさですが、ゆくあてを見失った自分の帰るところは、とゞのつまり教範であると気がついたのは、放心という波に身をまかせていてからしばらくたつてのことでした。そしてようやくそこに光明と安らぎを見つけ出し得たのでありました。

本文一行一行の文章、脚注の細字の一宇一句にはまさに万巻の書が集約されております。宗道臣師家の言語に尽せぬ豊かな人生の経験が凝縮されています。そして見事悟得された真理が光り輝いているのでした。雀躍しながら「悟りは我が脚下にあり」と反復しつづけました。

苦悩しつづけたはずの酷暑の夏も、今から思えば、濃緑色に生い繁ったプラタナスの並木道を驟雨がかけ抜けるが如く、一瞬に終りました。そして徐々に深まりゆく秋。ようやく原稿をかき終えた今日は十月五日。旧暦八月十五夜の月。中天にぽっかり浮かぶ満月は、まさに苦界を照らす「真如の月」であります。早くも散ってしまったきんもくせいは、舗道にオレンジ色のじゅうたんを敷きつめて、静かに月光の中で甘い香りを漂わせています。このように月日は一瞬にして流れゆきましたが、私達に残されたものは何であったのでしょうか。

それこそ「金剛禪少林寺の思想と哲理」であったのです。

発行 少林寺拳法実業団全国大会
実行委員会

編集 峰 徹
〒615 京都市西京区川島滑樋町40の9

ポスター
表紙 イラスト 上野 恵美子

写真提供 日本少林寺拳法連盟総本部
印刷 いまい印刷株式会社

— M E M O —

動

易筋行



少林寺拳法の歌

作詞 加藤省吾
作曲 小川寛興
キングレコード

1 拳は他人のためならず
わが身を磨くためにやる

七度^{ななたび}転んで起き上る

教えがじんと胸にしむ

2 正を愛し義を守る

ダーマの道は涯^{はて}しない
血肉は分けぬが仲間なら
苦しいことは助け合う

3 義和門拳^{ぎわもんけん}の道を行く

貴様と俺は同期生
やろうじやないかよ男なら
一発どんとぶつかろう

4 度胸定めりやさくら花

恐れるものはなにもない
後手必勝^{ごてひっしょく}の活人拳^{かつじんけん}

正統伝えここに咲く

5 夢は一筋若人の^{わこうど}

半ばは他人の幸福^{ひと}^{しあわせ}

半ばはわが身の幸福を
心に誓う少林寺